

中・近世における外郎(ういろう)家と  
売薬・透頂香(とうちんこう)の  
展開に関する薬史学的研究

1996年

杉 山 茂

# 目 次

序 論 .....	1
本 論 .....	5
第1章 医家としての外郎 .....	5
1. 外郎日本渡来の経緯 .....	5
2. 医家としての外郎の系譜 .....	6
3. 日本人は中国に医学・薬種を求める .....	15
4. 医家としての外郎に影響を与えた中国医家とその学説 .....	16
5. 四大家説の普及とその限界 .....	22
6. 経済的に見た中世医師 .....	25
7. まとめ .....	27
第2章 薬業家としての外郎 .....	31
1. 京都外郎の薬業家への転身 .....	31
2. 狂言・唐薬に描かれた中国人薬業家のプロフィール .....	31
3. 京都外郎の合薬（既製薬） .....	38
4. まとめ .....	44
第3章 小田原外郎の成立 .....	47
1. 戦国期特権商人 .....	47
2. 小田原外郎の出自について－江川家との関連（1） .....	47
3. 小田原外郎の出自について－江川家との関連（2） .....	52
4. 補論・江川伊右衛門のこと .....	54
5. まとめ .....	56

第4章 江戸期の外郎について .....	57
1. 江戸期の外郎 .....	57
2. 補論・お歯黒と五倍子（和製阿仙薬） .....	62
3. 江戸期売薬の繁盛ぶり .....	64
4. 外郎の宣伝 .....	65
5. 経済面から見た外郎（一つのシミュレーション） .....	73
6. まとめ .....	75
第5章 明治期からの外郎 .....	77
第6章 外郎餅 .....	81
総括 .....	83
注及び参考文献 .....	85
謝辞 .....	91
主論文目録 .....	93
主査, 副査名 .....	95

## 序 論

日本最古の売薬である「外郎<sup>註1)</sup>・透頂香」については、その希少性、特殊性の故に、様々の文献、特に医・薬学書に記載されている<sup>1)</sup>。しかしその内容は系統的でなく、ごく一部に限られていたり、又二次資料からの引用であって、原典に溯った詳細な調査は皆無であるといっても過言ではない。著者は1956年に、その初歩的成果を発表した<sup>2)</sup>がその後も機会をみては資料の探索を重ね、40年後の今日ほぼ完結をみるに至ったので、ここに集約・発表する。外郎家は室町後期までは医家として、その後は薬屋として活動したのでここでもそれを別けて説明する。

透頂香など一連の薬を処方したのは、外郎家の開祖である陳延祐の兄、陳順祖である。彼は、中国元の時代に大医院の職にあった医師である。弟の延祐は、元で禮部の員外郎という文科系の職にあったが、兄と共に来日してその薬を売り広めた。子孫を残したのは延祐の方であったため、順祖はその製薬と医学の知識を外郎家の子孫に伝えた。

ところで、中国では13世紀初頭から始った〔黄帝内経〕<sup>58)</sup>の見直しが実を結び、医学の新理論が創造され治療面でも大きな発展を遂げた。その時期は、日本では室町時代にあたり、日本の医師も唐、宋の医学を脱し、新しい医学を身につけようと模索していた。中国では劉完素、張從正、李東垣、朱丹溪といった医家が出て、のちに李・朱医学といわれる素地が形成された。それに対して日本では竹田昌慶、田代三喜といった、それまでの官医や僧医と異なった新しい医家が明からその理論を学び日本にもち帰った。外郎の登場も丁度これに重なるもので、恐らく前述の中国の新理論を持って日本に帰化しそれを普及したものと思われる。

第1章では外郎が元の大医院という職にありながら、元末日本に帰化せざるを得なかった理由を説明し、順祖、宗奇、常祐、祖田、友蘭という医家として

の系譜を述べ、日本で大変もてはやされた記録を細かく記述した。彼らは日本の上流階級である公家や五山の僧らと交際し、非常に優雅な生活を営んだ。室町期の医業・薬業に携わる人々が、中国人の医家や薬屋をいかに尊敬の念で見たかを客観的な事例を並べ考証した。

さらに当時最先端の中国の医家達の理論をなるべく解りやすく解説し、外郎達の医学理論につき説明した。同時にこれらの理論の限界も明らかにし、抽象的・捨象的原理が如何に現実の治療に役立つ薬の処方に問題を持ち込んだかを批判的にとらえた。

「假名草子」に描かれた理論倒れの医家の描写も紹介した。当時米一石650文の時代に宮中に診療して一回20,000文の報酬を得た竹田氏の例をとり、公家、将軍の診療に当たった外郎の富裕ぶりを推測した。

第2章では、室町末期から医家から薬屋に変身した外郎を取り上げた。外郎がどんな薬剤を造り販売したかを文献的に調査し、当時の人々の間で唐渡りの薬種が如何に珍重されたかを当時の狂言「唐薬」に求め、これを考証した。

第3章では、京都外郎から小田原外郎への薬業の主体の移行を中心に解説した。すなわち小田原外郎は京都外郎の直系ではなく、三島大社の御神領の宇野から出た戦国期の特権商人で、葦山の江川家と同じ家系であることが証明された。当時の公家中御門宣胤<sup>46)</sup>は、今川家との連絡に来た「外郎家譜」<sup>10)</sup>にいう宇野定治と思われる「宇野藤五郎」を京都外郎の被官（家来）と呼んでいる。京都外郎は、最後の当主である外郎右近が蹴毬に熱中しすぎて、公家の飛鳥井家の家法に触れ、江戸幕府の採決で伊豆大島に流刑になり、その幕を閉じてしまったのである。

第4章では、江戸期の外郎を説明した。既に室町期より有名であった透頂香が、この時代でも大変売れたが、その理由の一つとして日本人も含めたマレー系人種が好む阿仙薬などのベテル・チューイングの習慣に根ざしていると推測した。又、透頂香には薬用の丸薬と、お歯黒婦人が使う芳香性口中咀嚼剤があ

ることを証明した。これには和製阿仙薬の百薬煎が主に使われた。

又江戸期の売薬は爆発的に売れ、幕末ではその薬方は3万方にも達した。本論文では、江戸期の売薬についてその内容を文献的に紹介した。理由として、当時は劣悪な衛生環境の中で病人が多かったこと、生計費がかさみ、今日でいうセルフメディケーションに頼らざるを得なかったことによるものと推察された。江戸期から間もない明治23年に国民皆兵の名の下、適齢者36万余人の内21万人が疾病その他健康上の理由で兵役免除になったことに、その現実を見ることができる（陸軍省第3回統計年報<sup>110)</sup>。

また江戸期における透頂香の成功は、巧妙な宣伝にもよると考えられる。すなわち絵草子や歌舞伎の台詞<sup>せりふ</sup>などにその例を見ることができる。又、透頂香の売上げに関する経済効果のシミュレーションを行った。小田原外郎は、透頂香の主薬に阿仙薬の偽薬（百薬煎）を使ったことをケンペルが示唆している<sup>94)</sup>。それを輸出していたことも指摘している。外郎は丸薬の外郎・透頂香だけでも1833年頃現在の価格にして9億円程度の売上げがあったものと推察される。

第5章では、明治期の外郎を概観した。政府や知識人は売薬を批判し、薬の処方一つに2円の売薬税が課せられた。外郎はそれを逃れるために、透頂香だけを売薬として届出し、あとは他で作る売薬の卸問屋になった。こうして税金を逃れ、他の薬舗同様外郎の売薬も元どおり繁盛した様子を紹介した。

第6章では、外郎餅について説明した。これは17世紀後半に現れたもので主原料は澱粉であり関西方面がその原点であろうと考えられる。

# 本 論

## 第1章 医家としての外郎

### 1. 外郎日本渡来の経緯

応安元年（1368）中国より元で大医院<sup>44)</sup>であった陳順祖と、禮部の員外郎であった延祐の兄弟が中国より渡来し日本に帰化した。外郎延祐の四代目の医師・祖田がその経緯を語り、それを詩にまとめたのが京都五山の内京都建仁寺246代目住持・寿桂月舟<sup>3)</sup>である。月舟は、室町時代その著書〔幻雲文集〕に陳有年員外郎遺像<sup>47)</sup>として次のように記している。「禮部員外郎陳氏祖田字有年。其先大医院順祖。法言韋宗敬號台山。乃台州人。而江南総管陳友諒宗族也。大元至正二十年。友諒殺偽主徐寿輝於大平路。自称皇帝。国號漢。改元大義。割拠江州。兵威大振。後明太祖高皇帝伐之。天下一統。順祖愧事二朝。来于吾邦。家筑之博多津。」上記の文章の大意は、次のとうりである。

すなわち元末1351年、異民族による中国支配を倒し、漢人王朝を回復するために起こった白蓮教徒の反乱（紅布の頭布を標としたため紅布の乱ともいう）が勃発した。主流派の紅布軍の中に明朝を建てた朱元璋がいた。主流派で力を得た朱元璋が南京を攻略した頃、西に西派紅布軍という徐寿輝集団があった。ここに陳氏一族の有力者陳友諒が登場する。彼は西派紅布軍で頭角を現し、至正二十年（1360）徐寿輝を鉄槌で撃殺し、自ら皇帝と称した。国号は漢で、元号は大義であった。至正二十三年（1363）両者は、湖口で激突した。ここで朱元璋軍の火攻が行われ、陳軍は完敗した。この年七月陳友諒は戦死した。その子陳理も、明の太祖に殺された<sup>49)</sup>。陳順祖は、この陳氏の一族で元の時代大医院の地位にあった。彼は来日の理由を二朝に仕えるのを恥じたとしているが、以上のような事情から明朝には仕えることができなかったものと思われる。

冒頭に述べた陳順祖と陳延祐の来日の経緯は、非常に現実的なものであった

と考えられる。

## 2. 医家としての外郎の系譜

上記の〔幻雲文集〕は続けて「鹿苑相国聞其名。召之不起。嗣子宗寿字大年。応相国之招入洛。遂奉鈞命使于大明。大有功也。大年子月海常祐。復承相府恩眷。診脈発薬。人皆為神。固三世醫也。有年幹事。如水傳器。學醫之餘。詠歌製唐律。」とあり、外郎祖田迄を医師としている。月舟は、同じく〔幻雲文集〕に祖田の子について陳員外郎友蘭晤公肖像<sup>48)</sup>なる文章を書き、友蘭も医家であることを示唆している。

### (1) 陳順祖と陳延祐

順祖の職名の大医院というのは、元の医制でこの時代は「御薬院」が皇室の医事を担当し、「大医院」が一般の医事を扱った<sup>註4)</sup>。〔幻雲文集〕は上記の如く、順祖は足利義満の招きに応ぜず上洛しなかったとしているが、〔本朝通鑑〕<sup>6)</sup>にも同様の趣旨のことが記載されている。

しかし貝原益軒はその著〔筑前国続風土記〕<sup>4)</sup> (1701) で、順祖を取り上げ「文才あり、兼ねて占相に通じ、且つ靈方を伝えて奇薬を調う」とし、「元の老臣なりしか」と述べているが、続いて如何なる論拠かは不明であるが「義満公の招きに応じ上京して、彼に種々の薬を献ず」とあり「就中、義満は透頂香を甚だ賞美して京都西洞院に宅地を賜る。その後博多に帰って妙楽寺に小庵を構えて明照と號す。後に崇福寺の無方和尚に衣鉢を受け、70有余にして死せり」としている。

余談であるが益軒は、〔風土記〕の中で小田原外郎を京都外郎の直系ではなく、その「家僕」とであると強調しているがこれは後述の著者の意見と合致する。益軒を含めこの時代の人々は、小田原外郎を京都外郎の直系としては見ていないようである。例えば黒川道祐は、その著書〔擁州府志〕<sup>5)</sup> (1686) で本家の庶流であるとしている。林羅山の〔本朝通鑑〕<sup>6)</sup> も、順祖を外郎の先祖とし小田



原外郎を本家の門葉としている。又日本史の研究者小葉田 淳氏も、その著書 [中世日支交通貿易史]<sup>7)</sup> に [幻雲文集] を取り上げている。[日本仏教史]<sup>8)</sup> の辻 善之助氏及び、[日本商人史]<sup>9)</sup> の豊田 武氏も同様外郎の先祖は順祖であるとしている。

陳延祐の名は、[外郎家譜]<sup>10)</sup> (1697) に初めて登場する。これは1647年京都外郎の当主外郎右近が蹴毬の曲事で遠流になり (後述)、京都本家が忘れられた頃小田原外郎が自家の権威付けのために、小田原郊外の早雲寺の沙門宗貞に依頼して元禄11年 (1697) 系統図一軸を作らせたものである。家譜の内容には、京本家から別れた筋書きに無理があるが、何らかの文献があったものか「日本渡来の外郎の先祖は、陳延祐という名前で元で禮部員外郎の職にあった」ということを述べている。禮部は、中国では礼楽、祭祀、貢奉 (試験) を司り、員外郎とは日本では治部省の丞という全くの文科系の職であって薬には何の関係もない。又 [外郎家譜] の特徴は、延祐の来日を元の滅びた後の日本の応安元年とし、その死を応永2年7月2日、73歳と明白にしているところにある。これが正しいとすると延祐の来日を1368年、生没年を1322~'95年と同定することができる。歴史的に重要なことは陳順祖の家系が外郎で続き、外郎の看板薬・透頂香さえ「ういろう」と呼ばれてきた事実である。[外郎家譜] が出てからは陳延祐を祖とする文献が多く、谷川士清<sup>ことすが</sup> (1709~'76) の [倭訓栞]<sup>11)</sup>、榎島昭武の [関八州古戦録]<sup>12)</sup>、関 修齡の [松窓慢録]<sup>18)</sup> (1800頃)、最近では宗田 一氏の [日本の名薬] も延祐説である。上述のように外郎の先祖としては、順祖と延祐の二説があるが、今日迄両者の関係について触れた文献はない。これに対し著者は順祖が兄、延祐が弟であるとの結論に達した。その推測理由を以下に述べる。

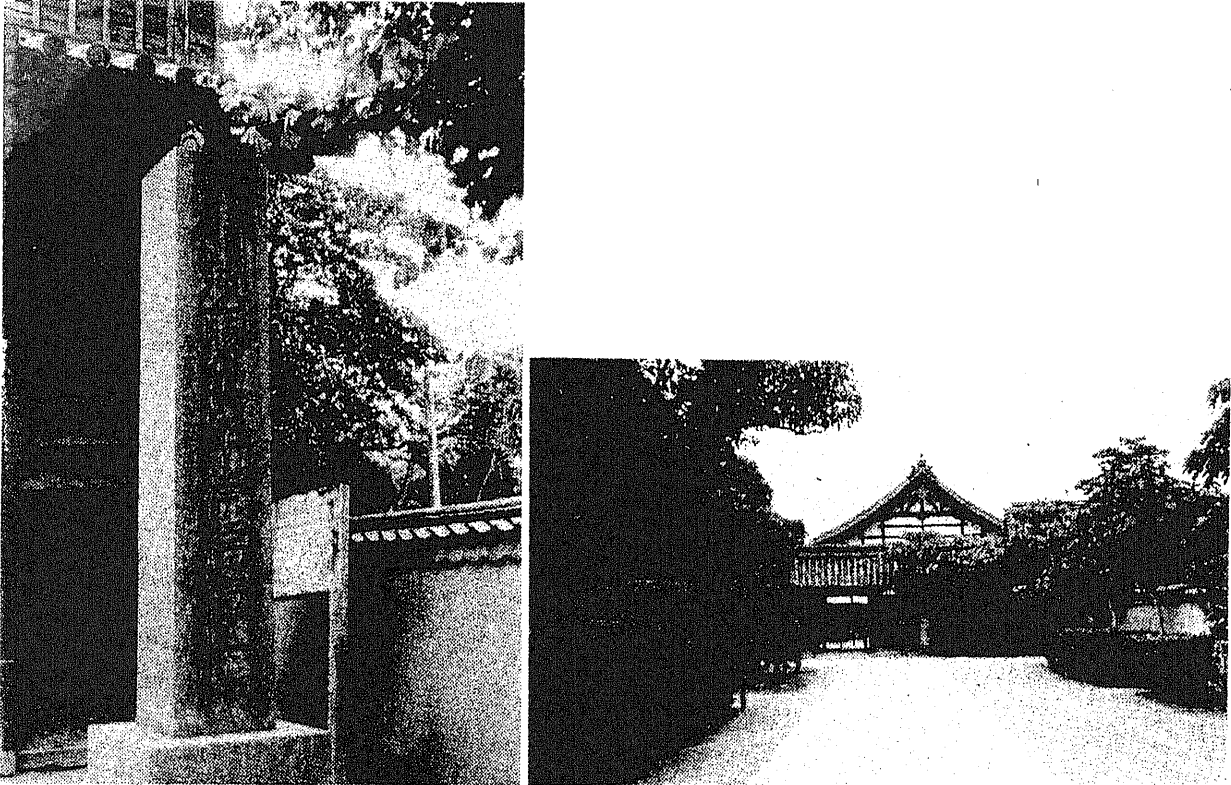
(イ) 延祐が来日したのは兄と一緒に、その時46歳である。従って兄の順祖は大医院の職にあり、その年令は益軒や道祐のいうように50~60歳の老臣であつたろう。70有余で生涯を閉じたとすれば恐らく日本では子供はできず、又早く

から禪門に帰依しているから妻帯もしていなかったと思われる。

(ロ) 延祐に大年宗奇が生まれたのは延祐50歳の時である。順祖に頼んで薬を作って貰い、それを売って歩くという生活は必死であったろう。薬についても勉強し、人に問われれば外郎と答える。こうして外郎薬は有名になった。

(ハ) 従って子孫を残したのは延祐であるから、以来皆外郎を名乗った。こう考えれば順祖と延祐の関係は兄弟としても解釈できる。

最後に触れたいのが、大覚禪師関与説である。鎌倉建長寺の開山蘭溪道隆、即ち大覚禪師が来日(1246)の折、薬を持参し、小田原の士人に与えたのが外郎透頂香だという説である。この説は案外根強くて、浅井了意の[鎌倉九代記]<sup>13)</sup>(1673)は「大覚禪師に同行した員外郎という者が京都に住み着き透頂香を売り、その子孫が小田原に下り薬を官名で呼び、小田原外郎として往来の人に商売した」と記されている。江西逸志子の[北条五代記]<sup>14)</sup>(1672)、岡本為作の[北条時頼記]<sup>15)</sup>(1691)も大覚禪師説を採っている。後年[駅路の鈴]<sup>16)</sup>(1858)を書いた遠藤数馬も大覚説である。伊勢の貞丈も[貞丈雑記]<sup>17)</sup>(1843)に大覚禪師を取り上げている。黒川道祐も[擁州府志]<sup>9)</sup>(1686)で「大覚禪師が伝えたという透頂香を小田原人が京都に来て売っている」としている。著者は、小田原外郎が京都外郎の直系でないため(後述)、京都外郎が盛んであった頃は小田原外郎も京都本家の手前、自家の系統を明確にでき難く、代わりの箔付けに大覚禪師説を持ち出したのであろうと考える。京都外郎と小田原外郎の関係については後に詳述する。



陳順祖，陳延祐が参禅したという崇福寺の山門と境内  
(現 福岡市博多区千代4丁目)

(2) 大年宗奇<sup>だいねんそうき</sup> (1372~1426)

大年宗寿ともいい [外郎家譜]<sup>19)</sup>によれば延祐50歳の時の子で，やはり崇福寺の無方師に参禅して月照と号した。

彼は博多より京都に上り医道拔群という評判を得，自分は外郎の子であると言っている。応永9年2月26日(1402)吉田社の神主吉田兼熙が病気の時，宗奇は治療に当たった。[吉田日次記]<sup>20)</sup>はその有様を「早旦外郎(宗奇)入来，

是唐人之子也，於日本誕生，取父名号外郎，是異朝之官也 医道拔群之由人々示之間，招引之，湯秘藥一種可調進之由甲之，事體神妙也。」としている。公家の山科教言も腹病の時，薬の調合を宗奇に依頼している（応永15年11月晦日－1408）<sup>21)</sup>。尚宗奇は応永14年（1407），15年，17年と教言卿と接触し脈を取っている。教言卿は，薬に詳しく数十種類もの薬剤を服用している。応永9年日野兼宣公も外郎を訪れている<sup>22)</sup>。

宗奇は，朝鮮，中国との交流にも関心を持ち積極的に活動している。応永26年（1419）幕府は朝鮮に信使を送ったが，その時の副使は宗奇の子常祐とその弟である陳吉久<sup>ちんよしひさ</sup>であった。翌年朝鮮使が来日した時には吉久が博多迄出迎え，京都では宗奇が將軍義持との会見にも列席している<sup>23)</sup>。この頃吉久は兵庫の名族平方氏の養子になっていたらしく，平方の姓を名乗った。平方氏も朝鮮との通商に参加している。

宗奇は，通事として遣明船に同行し，何度か明に渡っている。応永11年（1404）には明に使いして靈方丹なる薬を日本に持ち帰り，翌年その功により四条西洞院に宅地を賜り<sup>注2)</sup> 儒医を兼ね励んだという<sup>10)</sup>。この年細川満元より [聖剂総録]<sup>25)</sup> 200巻を与えられ厚遇されたという [本朝通鑑－応永11年の条]。満元はしばしば大年宗奇の薬を飲み，驗有りとしている [同本朝通鑑]。

靈方丹は，幕府の倉中にあり透頂香とは別の薬である。当時の百科辞典 [撮壤集]（享徳3年－1454）に透頂香の記載があり，靈宝丹の記事もあって靈方丹と同一薬剤か否か不明である。ここには66種類の合薬が記載されている。

[蔭涼軒日録] には延徳二年（1490）閏八月十四日に「晚来陳外郎来。対面勸盃。件々談渡唐相違之事。外郎話云。鹿苑相公御代。我祖父為遣唐使合靈方丹。持以帰朝。於今在公府倉中。実永楽二年本朝応永七年也。外郎帰後引三国一覽見之。則永楽二年甲申本朝応永十一年甲申也。外郎所謂相違也。」とある。

(3) 月海常祐<sup>げっかいじょうゆう</sup>（1392～1468）

延祐から三代目常祐も診脈を取り生死を知り，吉相を占った。晩年宅地中に

一庵を設け蔵春と号した<sup>10)</sup>。山科言国は、その日記〔言国卿記〕<sup>26)</sup>で文明6年4月5日(1474)「今日常祐～没後13年」といい、〔山科禮記〕<sup>27)</sup>の中でも応仁2年4月6日(1468)「常祐七ヶ年カタノコトク仏事之有」とある。

(4) 外郎祖田ういろうそでん(1438～1518?)

延祐から四代目の医師祖田は、外郎家として幕府のお抱え医師(法眼)となり、医家として又文化人として京都五山の僧、公家、外国人(朝鮮・中国)達から高い評価を受けた。その医薬の付与、漢詩の交換などの活動の有様が、以下の多数の文献に生き生きと書かれている。将に外郎家中興の祖であった。

祖田は、年少の頃建仁寺(臨濟宗)に学んで書を読み、長じて医師となった〔日本仏教史〕<sup>8)</sup>。長祿2年正月7日(1458)外郎毎年御薬進上〔長祿二年以来申次記〕<sup>28)</sup>、同年12月27日御薬、とうちん香五囊進上〔同記〕との記事があり、又時代は下がるが永正7年正月7日(1510)御薬色々進上〔殿中申次記〕<sup>29)</sup>、同年6月2日薫衣香十囊と記されている。これは毎年のことらしく、〔年中定例記〕<sup>30)</sup>など室町古記にも同様の記載がある。文正元年5月19日(1466)外郎医師(祖田)薫衣香持参、毎年の例であり〔蔭涼軒日録〕<sup>24)</sup>、文明9年5月5日(1477)將軍へ薫衣香五囊初めて進上〔蜷川親元日記〕<sup>31)</sup>、文明13年正月7日(1481)親元へ五種芳薬(食薬、玉屑丸、龍麝円、透頂香、木香梨片散)を持参、伊勢貞宗、兵庫助貞藤にこれを進める〔同記〕、同年6月11日親元へ薫衣香二囊送る〔同記〕などの記載がある。

文明13年6月24日幕府は、輸出用の硫黄使節として祖田を薩摩に下した〔薩藩旧記〕<sup>32)</sup>。室町年中行事として12月27日外郎が將軍に会い、自分は通事であると答えている〔海録卷10〕<sup>33)</sup>。

文明16年(1481)外郎は堺の蔗軒(大公季淑)に詩作を依頼した〔蔗軒日録〕<sup>45)</sup>。同17年(1485)外郎蔭涼軒集証に薫衣香二包を持参〔蔭涼軒日録〕、この頃祖田と五山僧との交流が多い。前述の〔幻雲文集〕、〔幻雲詩藁卷三〕などに京都建仁寺の僧寿桂月舟(文明、永正の頃の人)が祖田やその子友蘭のために詩作

をしている。又南禅寺の僧、景除周麟も祖田のために詩作している〔翰林胡蘆集五〕。「陳外郎杏林居士之家，薛蘿蒙壁艾之粉之，髣像於熊峰一道之飛流，客至詰篤則告白，居不山而吾目不可無山色，亭不瀑而吾耳不可無瀑韻，吾得之於驪黃牝牡之外，亦是詩人之妙術也，與居士方外講交者皆賦之，予次韻寄題」。

文明18年（1486）祖田中風病に潤體円，有熱者に清心円を投与〔蔗軒日録〕。同年3月14日中国人と砂糖について話す〔同日録〕。同19年正月21日（1487）集証に五種芳薬を送る〔蔭涼軒日録〕。長享元年（1487）から息子友蘭の記事があり，同年祖田が，又翌年友蘭が禅僧となる。この頃から外郎は，明との通交から身を引いたようである。同2年12月17日集証外郎から大初快気湯を貰う〔同日録〕。同年2月高麗官人杏林亭（外郎宅）に詩を賦す〔同日録〕。「高麗官人廿六日和杏林亭諸詩。有大軸一卷。有跋。一覽而返之。」

延徳元年（1489）正月21日外郎集証に五種薬持参，翌年正月にも同様，12月20日には大初平胃散を送る〔同日録〕。どうもこの頃には京市中に透頂香を始め，種々の薬剤を売る店があったように思える。外郎宅が店であったのかもしれない。当時の習慣で医師は，診察して薬を処方する場合と依頼により合薬を売る場合の両方があった。明応元年（1492）〔七一番職人尽歌合〕<sup>34)</sup>には唐人と思われる街の薬売りが登場する。狂言〔煎じもの売り〕に陳皮，乾姜，海人草，肉桂，甘草，人参などの煎じ物を祇園会に売る場面があり，同様〔膏薬練り〕には小さい粒の例えとして透頂香が引き合いに出されている。

明応元年（1492）正月16日外郎集証に長命丸を持参〔蔭涼軒日録〕，同2年（1493）3月29日外郎が集証に五囊の薬（薰衣香二包，香筋一雙）を送る。文亀2年（1502）5月17日禅僧病態難治，外郎に良薬求めるとの記載があり〔実隆公記〕<sup>35)</sup>，永正6年11月19日（1509）外郎が実隆に目薬（珍珠散）を持参する〔同記〕。翌年頃から祖田は近衛尚通に近づき，永正9年（1512）5月5日外郎が尚通に，鼻口に付け年中の疫を防ぐ薬を進呈する〔御法成寺尚通公記〕<sup>36)</sup>。同13年（1516）正月7日外郎，尚通に五種芳薬を持参する〔同記〕。

永正14年(1517)5月2日外郎被官(家僕)宇野藤五郎が、中御門宣胤<sup>46)</sup>に薰衣香、蘇香円、潤體円、牛黄円、珍珠散、透頂香等を持参。享徳3年(1530) [本朝通鑑]に「洛人陳外郎透頂香を売る」とあり、この頃から外郎家の [雍州府志] のいう成薬店・虎屋としての出発がある。

(5) 友蘭周晦<sup>ゆうらんしゅうかい</sup> (1458~1508?)<sup>48)</sup>

祖田の子である。以下代々の外郎の名前は、文献にはあるが生没は定かでない著者の推測が含まれている。

延徳3年(1491)集証外郎から医書 [鎖碎録]<sup>37)</sup>を借り、後これを返却する。この本は、公衆衛生に詳しく歯磨きの重要性にも触れている [蔭涼軒日録]。友蘭は祖田の嗣子で、彼が医師であったことは、前述の [幻雲文集] に次のように述べられている。

「諳三部九候脈之大法。陽氣無汗陰氣多汗。治五臟六腑病于未萌。富貴縦擁金屏繡褥。」

又 [幻雲詩藁第二] に次のような文言がある。

「杏林員外郎赴登州。令嗣禮部公作詞。以惜其行。外郎去后。蓋孝之至也。俾予和之。因押芳勺。以督歸期云。」この時代能登七尾の領主、畠山氏<sup>11)</sup>は京都文化の導入に熱心で京の知識人を呼んで歓待した。祖田の頃から何らかの関係があったものと思われる。

(6) 有春外郎<sup>ゆうしゅんういろ</sup> (1478~1538?)

二位杏林を名乗る。永正16年(1519)正月7日外郎の弟が薬三種尚通に進上 [後法成寺尚通公記]、同年薬を種々宮中に進上する [殿中申次記]・[年中定例記]。

大永年間(1521~'27)外郎は、借金の一割を納めてその債務を免れた [中世商人史]<sup>9)</sup>。大永5年外郎の弥五郎、越後に下る [上杉文書]<sup>38)</sup>。外郎は、多数の雇い人を抱えていたと思われ、3・4人の集団で行動していたとも考えられる。

(7) 徳倉庵外郎 (1508～'78?)

二位杏林を名乗る。天文8年(1539)3月4日、外郎は將軍に薰衣香を献じた。同年7月28日外郎、近年能登に在国するという〔大館常興日記〕<sup>39)</sup>。又同日の日記に外郎法眼という文言があり、この頃はまだ医師を続けていたと思える。天文11年2月11日(1542)猿楽「唐船」の記述がある<sup>註3)</sup>〔同日記〕。この時代、外郎家の透頂香は有名で、当時の百科辞典である〔橋本經亮節用集〕(1565),〔永祿五年節用集〕(1562),〔伊京集〕(1590?)にそれぞれ記載されている。

(8) 土倉庵外郎 (1528～1600?)

外郎は、祖田の医師名二位杏林を称して、ある時は医師、ある時は薬屋として商売をしており、どちらかといえば虎屋なる成薬屋が本業になりつつあった。〔本朝世事談綺〕<sup>40)</sup>に「洛陽西洞院、陳外郎二位杏林毬に手練して種々の曲を蹴たり、その頃の地下人専らこれを倣う。外郎派の始めこれなり。当時御家の流儀を学ぶ輩は、転業なりとてこの流を用いざるなり。その子右親衛政光父の伝えを得る。」とある。この頃外郎は既に上流階級と付き合わず、一般の商人と同じ庶民の中での暮らしをしていたと考えられる。

(9) 外郎右近・右親衛政光 (1580～1647?)

完全に虎屋の主人だったと思われる。店は番頭に任せ、蹴毬に没頭し江戸、大阪と遊び歩いていたらしい。しかし飛鳥井大納言雅宣卿、宰相雅章卿は代々蹴毬の本家の家柄で、外郎が曲毬などして同家の家法に背いたとして江戸幕府に右近を訴え、同人は伊豆大島に遠流になった。正保4年(1647)8月1日のことである〔徳川実紀〕<sup>41)</sup>。このことも外郎が庶民の仲間入りをした証拠である。

外郎右近のことは〔足薪翁記〕<sup>42)</sup>、〔玉滴陰見一延宝中写本〕(1664～)、〔きのうはけふの物語〕(1673)、〔俳諧蒙求〕(1678)など多数の文献に出ており、俳句や浄瑠璃〔紫の一本〕(1684)にも詠みこまれている。右近は江戸に出て、



蹴毬の本も出版している [類聚名物考卷1]。

この頃儒者の中江藤樹 (1608~'48) も外郎家に宿泊している。又 [日葡辞書] (1603) に透頂香の記載がある。

#### (10) 17世紀以降の外郎家

この後外郎家は、外郎町から藤本町、上長者町と移り主に虎屋と称し薬屋として過ごしたらしい。貞享2年 (1685) の [京羽二重]<sup>43)</sup> は、商人としての外郎二位杏林を取りあげ西洞院錦小路下る町とある<sup>註2)</sup>。寛文末 (1670~) に成立した [諸国買物調方記] にも京都の項に「名薬所外郎とうちん香西洞院錦下ル二位杏林」とあり医師の欄ではない。正保2年 (1645) [毛吹草]<sup>44)</sup> にも京の欄に外郎透頂香がある。

同家は、元禄頃迄は続いたらしく思われる。ただ寛文10年 (1670) [本朝通鑑] に「この年洛下にて陳外郎なる者外郎透頂香を売る」という記事があり、[雍州府志]<sup>5)</sup> (1686) にも「今小田原人が京師に来て外郎透頂香を売る」の記述が見られる。

### 3. 日本人は中国に医学・薬種を求める

嘉清の末年 (1370年頃) 中国で出版された [日本風土記] なる本に「五経は即ち書経を重んじ、易詩春秋を忽にす。四書は即ち論語、学庸を重んじて、孟子を悪み、仏教を重んじて道教なし。古医書の如きは見る毎に必ず買う、医を重んずる故也。」とある。建徳2年 (1371) 12月30日義堂周信は、入元帰朝僧中岩の言を引き「船中南蛮・日本等の薬材で一杯だった」と言っている [日工集]<sup>50)</sup>。当時の中国は、元から明に変わったばかりの時代で金・元の医家の百花争鳴の後を受けて医学が盛んな国であった。又殊に元の時代には、南方や中近東との海上交通が盛んで香辛料系の薬種が沢山輸入された。

丁度日本の医家も、唐・宋医学の模倣を脱し新しい医学を模索する時代であって、竹田昌慶、田代三喜、吉田宗桂らが渡明している。その時代に当然医学の

先進国であった中国やその周辺の国々の医家・薬種を扱う人々は、大変もてはやされた。

外郎も明から渡来した医師であるが（1386）、宝徳元年（1449）8月26日琉球商人が幕府に薬種を献じ、同年5月高麗人が人参300両を日本にもたらした〔康富記〕<sup>55)</sup>。宝徳2年（1450）には明人堅致が博多に来て薬種貿易を行い、薬種商のための商人宿を開いている。寛正元年（1460）、京の四府駕輿丁座に薬種、唐物を売る座ができ、同5年（1464）奈良興福寺大乘院に唐人が薬種を売りに来た〔大乘院寺社雑事記〕<sup>56)</sup>。文明3年（1471）10月13日大乘院門跡経覚の病氣診療に唐人医が来ていた〔同記〕。天文18年（1549）9月11日山科言継は唐人薬屋蒼嵐と談合、商売をしている〔言継卿記〕<sup>54)</sup>。地方にも唐人の進出が目立ち、明応7年（1498）越前の一乗谷に唐人の住居があり、文亀3年（1503）には敦賀に唐人橋ができた。関東にも、小田原に唐人町があり、川越には唐人小路がある。弘治3年（1557）北条氏が、岩代の白川氏に唐人十一官を紹介している<sup>57)</sup>。恐らく彼らは医師であろう。大航海時代を反映して、この頃梅毒が日本にも侵入してきた。永祿12年（1569）奈良にカサ（梅毒）の病氣が流行した時、堺の唐人医がその予防の方法を説いたという〔多聞院日記〕<sup>52)</sup>。九州の唐人町については、小葉田 淳氏の著書に詳しい<sup>51)</sup>。

この頃室町幕府は輸入薬種、染料を貯蔵して地方の大名に高く売りつけていた。そのためこの頃には薬種、染料などに詳しく、中国・高麗人に付き合える人として、特に禅僧などが多く輩出した。

#### 4. 医家としての外郎に影響を与えた中国医家とその学説

1126年、金は南を攻め宋王朝は首都（河南省開封市）を放棄して南宋に移った。金の統治下において遅れた社会経済は、封建制の生産を破壊し、人民の生活は大変に苦しく、飢餓や労役のために種々の病氣が発生した。中国の医家は、これらの病氣に対処し治療をする必要に迫られた。当時の医家は、医療上の問

題を解決するために現実の状況に立地して深く [黄帝内経]<sup>58)</sup>などの古典医書の理論や原則を追求し、多くの独特の医学理論と治療方法を発展させた。その努力は臨床実践に生かされ、優れた指導的役割を果たしたので当時及び後世の多くの医家が、その理論と治療を深め発展させた。

これを金・元の学術争鳴と呼び、特に中国の医学史上有名な、それぞれ特徴ある四大家の学説が形成された。彼ら四大家の説は、中国の医学理論の形成に多くの影響を与え、[中国医学史講義]<sup>註4)</sup>でも高く評価されている。明に留学した日本人の医師もこの理論を学び、日本での李・朱医学の隆盛をみるに至った。

この時代明に渡り、その医学理論を学んだ日本の医師には竹田昌慶、田代三喜らがあり、殊に田代三喜は後の曲直瀬道三らと共に上記の李・朱医学の隆盛をもたらした。外郎も同時代の医師として、来日以来日本の上流階級の支持を受けたのもこれら新時代の医家の理論を身につけていたからである。

以下これら四大家の理論の成立を、簡単に述べてみたい。

(1). 劉完素<sup>りゅうかんそ</sup> (1110~1200)

劉完素は、字は守真、自らは通玄処士と号した。南宋時代、金領の河間（河北省河間県）の人であったので、後人は河間先生と尊称した。彼は25歳から [内経] のうち [素問] の研究を始め、60歳まで中断することなく運氣学説について詳細な見解を提出し、[内経] の五運六気の学説について、鋭い研究を行った。五運とは五行の運行を示し、その順序には相勝（土木金水火）と相生（木火土金水）とがある。六気とは天地間にある六種の気で、陰・陽・風・雨・晦・明を表す。

このため彼の学術思想の中で、運氣学説が重要な位置を占めている。彼が運氣学説を重視し研究したのは、医療上の実際問題を解決するためである。彼は運氣が四時（春夏秋冬）の正常な規律を支配することを認める一方、運氣には平常の場合と変化する場合があることを指摘し、機械的に運氣説を運用し某気が主たる年には必然的に某病が発生するなど、固定的に捉えることに反対し

た。彼は五運のうち四運はそれぞれ一つであり、火だけが二つに分けられると  
考え、火と熱が運氣のなかで主要な位置を占めるとした。

劉完素は、この「火熱論」で有名であり後世その説に従う者が多かった。彼  
は〔内経〕を深く研究し、〔素問〕の病氣十九条は、大体火熱に因る病気であ  
ると見なした。例えば「各種の熱・盲・ひきつけは皆火に属し、各種の腫れや  
腹部の腫脹なども皆熱に属する。各種の嘔吐や吐酸・暴注下迫なども熱に属す  
る」などである。〔素問〕のいう「各種の疼痛や痒瘡は皆心に属し、各種の麻  
痺や喘息は皆上に属し、目まいなどは皆肝に属し、急激な強直は風に属する」  
という各条も、彼は間接的に火熱の範囲に属すると見なした。

彼は火熱の学説を熱心に説き、寒涼薬(石膏、大黃、黄蓮、茫消、半夏、黄  
柏など)の使用に独特な研究を行ったので、後世の人は彼を「寒涼派」と呼ぶ  
ものもある。しかしこれは「火熱論」を説く者が、寒涼だけを知ってその他の  
ことを知らないということではない。これはつまり陽中に陰があり、陰の中に  
陽があることをいうものである。臨床にあっては水火の多少を鑑別すべきであ  
り、若し水が少なく火が多ければ陽実陰虚で熱を病み、水が多くて火が少なけ  
れば陰実陽虚で寒を病むとした。従ってその治療法は実を寫し、虚を補うとい  
うものである。

例えば下痢の治療には熱に属するものは苦寒剤(芍薬柏皮丸など)を使用し、  
寒に属するものは辛熱剤(将水散：成分として半夏、薑などを含む)を使用す  
る。傷寒(急性熱性疾患)の治療では熱に属するものには辛涼剤(石膏湯など)  
を用い、寒に属するものには辛温剤(姜活散など)を用いる。中風の治療には  
熱を清め風を去る寫青丸(当帰・龍胆等)を用いた上に、<sup>のぼせ</sup>経絡を温め厥を治す  
る附子続命湯を用いた。これによって劉氏が辨症施治(良く症状を診て、治療  
を施す)に重きをおいたことが解る。

## (2). 張從正 (1156~1228).

張從正、字は子和、自らは戴人と称した。南宋時代、河南省の人である。彼

は劉完素の説にのっとり、五運六気の変化と疾病との関係を非常に重視した。劉完素が専ら火熱発病の説を説いたのに対して、張從正は風・寒・暑・湿・燥・火など天の邪や、霧・雨・雹・氷・泥など地の邪が、最も人を病気にし易いとみなし、次に酸・苦・甘・辛・鹹・淡など水穀の邪を飲食することも病気の原因と考えた。これらの病因は外から来たり内から生じたりし、すべて人体内にもともとあるものではない。ある経が病気になったら直ぐにこれを排除すべきで、体内に停留させないというのが張氏の治療学の根本思想である。邪を排除する方法は〔傷寒論〕の汗・吐・下の三法を原則としている。

その上彼の用いた汗吐下の三法は、決して狭いものではない。彼は「引涎・瀉涎・くしゃみ・追涙などすべて上行するものは皆吐法であり、灸・蒸・薫・漂・洗・熨・烙・針刺・導引・按摩などすべて表を解くものは皆汗法であり、催生・下乳・磨積・遂水・破経・泄気などすべて下行する者は皆下法である」と言い、このように三法の範囲を拡げることによって、独特の治療法を確立した。

張氏は邪の除去を力説し、攻撃の方法を用いたため、後世彼を「攻下派」と呼ぶものもある。しかしこれは張氏の治療法が攻撃一本槍で、補養がないという訳ではない。彼は「余の三法は諸法に当たるものだ。しかし余はこの三法をとって諸法を捨て去るという訳ではなく、その病気にとって良い方法を合わせ用いるのだ」とし、補養の方法についても、「辛は肝を補い、鹹は心を補い、甘は腎を補い、酸は脾を補い、苦は肺を補う」とする理論を述べ、凡そ五臓を助けるものは皆補ということがいえ、人参や黄耆などの薬に限らないとした。この点は臨床治療にとって大変現実的で指導的な意義をもっている。

(3). 李杲<sup>りこう</sup> (1180~1251).

李杲は、字は明之、晩年には東垣老人と号した。彼は年少の頃から医書を読むことを好み、張元素（後述）に厚く礼して師と仰ぎ、その知識を悉く得た。李杲は元素の学説を受け継ぎ、処方や用薬に気味（薬性には寒熱温涼平の五気、

甘酸鹹苦辛の五味があるとした)の升(昇)降や浮沈の配合を大変重視した。彼が創製した処方薬は薬品の種類が多く、用量は少ない。

彼は〔内経〕〔難経〕<sup>59)</sup>などの古典医書を、いずれも非常に深く研究した。その医学理論は、皆〔内経〕の基礎の上に彼の実践上の経験を結合してまとめたものである。当時の社会環境は不安定だったので、精神的刺激、飲食の不摂生、生活の不規則あるいは寒暖不調などによって起こった病気が非常に多く、従ってこれらの病気は傷寒を治療する方法では効果のあがらないことが多かった。彼は実践上の経験から上述の病因が人の元気を損耗せしめて内傷を引き起こすとし、「内傷学説」を主張した。

李氏は五臓(心・肝・脾・胃・腎)中の脾、六腑{大腸・小腸・胆・胃・三焦(上中下に分かれ消化吸収と大小便の排泄を司る。上焦は胸中に、中焦は腹・臍の上に、下焦は臍の下に位する)・膀胱}中の胃が人体の生理活動上、最も枢要であると見なして「脾胃を内傷すると、百病が生ずる」という説を提起した。

この説に基づいて彼は「喜・怒・悲・憂・恐の五賊きずつけに傷られ、後に胃の気がめぐらず、過労と暴食がこれに続くと、元気が傷られる」と言い、これは精神的な原因が脾胃の内傷の発症過程で、先導的な役割を持つと説明している。従って彼は、上中下の三焦の元気を区別して補益し、それによって脾胃を補すというのを治療法の原則としている。

李氏は、脾胃を温補する方法を巧みに応用したので、後世に彼を「補土派」或いは「温補派」という。彼は治療上に升気・補気の重要性を強調したが、ある種の状況のもとではよく苦寒・降火の方法も採用した。これは彼が学説上独特の主張を持っているからといって、決して「辨症施治」の基本原則を粗略に扱ったものではないということを示している。

#### 附記. 張元素

張元素、字は潔古。南宋時代、河北省易水県の人である。劉完素と同時代か、

少し遅い。元素は〔内経〕の五運六気の学説や〔中臟経〕<sup>60)</sup>などについて深く研究した。彼は「運氣は均しからず、古今は軌を同じくしない。古い処方新しい病気を治療しても合わない」と考え、当時の気候と患者の体質などの状況に基づいて、臨機応変に薬を使用することを主張し、臨床上の現実的な需要に応えた。一般的な内科の雑病の治療法については、常に先ず臟腑の虚実を識別することから始めた。この様に革新的な精神に富み臟腑の虚実を重視する主張は、李杲に大きな啓発を与えた。

(4). 朱震亨<sup>しゅしんこう</sup> (1281~1358)

朱震亨、字は彦修。元代の浙江省金華県の人である。代々金華県の丹溪に住んだので丹溪翁と尊称した。

丹溪の医学の修行は〔内経〕を深く研究して得た他、河間や東垣などの学術思想の影響も非常に大きく、特に劉完素の火熱学説が彼に与えた影響は最も大きい。

朱氏の学問上の主要な論点は、「陽有余陰不足論」でありこれは劉氏の火熱論を更に進めたものである。劉完素は既に火熱が病因になることの普遍性と重要性を指摘したが、人体が火邪に感じ易いという内在の原因については、明確に述べていない。朱氏は上記の論によってこの欠点を補った。彼は〔内経〕に基づいて人身の「火」が妄動しやすいことを論証した。例えば火の妄動によって疾病を発生すると人身の「成り難く欠けやすい」精血は、必然的に焼けてしまうので、養生の面で「金・水の二臟を保養し」火の妄動を避ける手段を考えるよう繰り返し指導している。こうして医療に際し「陰分」を保養することの重要性を強調している。

朱氏は「滋陰・降火」の剤を巧みに用いたので、後世彼を「養陰派」と呼ぶ人もいる。彼が創製した越鞠丸(蒼朮、香附、川芎、神曲、くちなしなど)や大補陰丸(黄柏、知母、熟地黄、敗龜板)又瓊玉膏(生地黄、白茯苓、白蜜、人參)などは臨床上顕著な効果があったので、後人は広く使用し、内傷や雑病を

治療する著名な処方になった。その他、気・血・痰・鬱の諸病についても、多くの独創的な見解と豊富な経験を持ち医学上大いに貢献した。

彼は学問上上記のような独特の見解を持った人であるが、一面に偏しその他を否定するのではなく逆に辨症施治をも強調し、具体的な病状に基づいて温補の処方も用いた。

## 5. 四大家説の普及とその限界

### (1). はじめに

外郎医師らの医学理論は、時代から見て十分劉・張医学や李・朱医学の洗礼を受けていると考えられるので、これらの説の普及の実態とその限界に触れてみたい。

中世を通じて中国医学の指標になったのは、[黄帝内経]と[傷寒論]<sup>61)</sup>の二つである。[内経]の理論は、天地陰陽五行から始まり人体の五臓六腑との相関・配当を説く生理・病理論であり、大宇宙の天文・地文と小宇宙の人体の相関を論じて今日等閑に付されている気象医学の方向をも示唆している。しかし一方個々の患者に接する医師の立場からすると、[内経]には診断はあっても一般論に過ぎず、薬物処方などの具体的な診療の手引きにはならない。一方[傷寒論]には五行配当はなく、三陰三陽(太陽・陽明・小陽・太陰・小陰・厥陰)も病症の分類に使われる程度で思弁的理論は無く、診断・処方の各論に徹しているので理論は「法」と称して[内経]に仰ぎ、治療は「方」と称して[傷寒論]によるというのが中世の多くの医師のやり方であった。

従って臨床医の指針としては[傷寒論]の方がずっと役立ち歓迎されたと思われるが、事實は[黄帝内経]の陰陽五行配当の思弁的生理・病理説が宋代の宋学の性理説(人間の本来の性は天理そのものに合致しているという立場から、人欲を去って天理に近づくことが人間の課題であるとする)によって<sup>ふえんほきょう</sup>敷衍補強されて、金・元時代の思弁的な李・朱医学となり五運六気の大宇宙の法則が、



小宇宙の身体治療の段階まで支配する学説として普及した。日本でも室町時代後期に中国の李・朱医学の理論を移入し、後に後世派と呼ばれる大きな流れができる。

しかし陰陽五行・運氣とは天地・自然界に働く法則であり、それを生物・人体に当ては<sup>は</sup>嵌めようとしても無理である。古医方の大家吉益東洞は<sup>62)</sup>、これを「陰陽は天地の気なり、医に取るところ無し」と明解に断じている。

すなわち物質界の物理学的レベルの陰陽五行・運氣指標と、人体の解剖形態学的レベルの指標とは全く異なるということである。

## (2). 陰陽五行説と薬効

上記のように陰陽五行説は天地・宇宙の運行を説明する原理である。一方病症・病態は千差万別であり、それに対する薬物も正しく博物学的多様性を示す。人体の器官は有限であるから、五行と五臓というように大宇宙と小宇宙的対応がつけられるが、病症やそれに対応する薬物になると無限の広がりを見せる。それらを分類して表現するには、とても陰陽の二分法や五行の五分法だけではすまない。陰陽五行的分類が経験によってその妥当性に対する評価を受けるとき、多様な現象を更に細かく分類する必要が生じ、陰陽の他に虚実・表裏・寒熱等の補助的概念や分類概念を導入するに至る。それらを組み合わせると病症の表示は益々複雑になる。

そして薬方においてもそれに対応して、<sup>いんけいほうし</sup>引經報使<sup>し</sup>といって複雑な配当のされ方をする。すなわち人体には、気脈通行の通路になる十二の経があって薬物はそれぞれ選択的に特殊な経に入るから、その経の病にはその経に入る薬を用いなければならないとした。この説は南宋の張元素（前述）の唱えたもので、初期道三派に遵法された。かくして本来物理系の要素的発想である陰陽五行思想が、博物学的病症・薬物と接触してその分類原理になる。薬の気味、つまり五性（寒熱温涼平）五味（酸苦甘辛鹹）はそれぞれ五行に配当され、五臓との親和性が規定された。

従って現実には陰陽五行の指標はその原理に無理があり、医療体系を支配するものでなく、病気を後から意味づけ、理屈づける役割しか果たせず、治療体系の上にそっと乗った柔軟支配に過ぎなかったと考えられる。このような複雑で思弁的な医学理論は、同様に複雑な諸要素に対応する数多くの薬を使用することになる。後世の方では通例数十味の薬物を混ぜる処方にとられている。その結果薬効が中和して温和で効果は薄い、無難な投薬法になる。すなわち方剤中の薬味が少なければその作用が偏して強く、多味なる時はその作用は緩やかにして弱いと考えられた。外郎医師の頃の合薬が多味であるのは、しばしば処方を変更しない物だからである。又、投網療法でどれかが当たるという考え方でもある。現在の売薬も同じ考え方による。

概論として龍野氏<sup>63)</sup>は「わが国においては（中世）陰陽五行説や引經報使等の説が主として薬効論を支配したため、この象徴主義は人参は人の形のものが神霊ありとか、菖蒲根は一本に九節あるものが良いとか、石決明は九孔と七孔の物がよく十孔以上の物は不可とするが如き迷信的俗論と混同されて、本来の薬効論には大した影響を与えなかった」としている。

実際に江戸初期における医師がどのように診断し薬方を決めたか、そのプロフィールを窺う資料の一つとして浅井了意が寛文5、6年（1665）頃にその頃の医師の姿を滑稽に描いた「假名草子・浮世物語」<sup>64)</sup>を紹介する。題名は「薬違いをせしこと」である。

今は昔、浮世坊ある在郷に行きて、しかるべき人の門に立ち「これは諸国修行の医師也。何煩わづらいなりとも、慈悲のために脈をも取り薬を与へ、灸をも点じて与ふべし」という。折しもその家にこの程労る病人あり。さらばとて呼び入れたれば、両の脈子細らしく取り、立ち退きていうやう、「凡そ脈に浮・沈・遅・數の四あり。人の両の手に寸・関・尺の三部、左右六脈に浮・沈・遅・數を掛くれば、六脈には二十四脈これあり。これを細かに取り分けて、五臓六府

の病の品々、風・寒・暑・湿・気・血の虚实、内傷・外感の本を正しくして薬を与ふるに、いづれの病も癒へずということ無し。中にもこの病は悪寒・発熱・頭痛あり。悪寒とは寒く、発熱とは熱気のこと、頭の痛みこれあり。脈は緊絃きんけんなれば掲諦ぎゃていという煩いなり」と言ふ。家主聞きて、「掲諦とはいかなる名にてはべるやらん」と問えば、「瘡さのことなり」と言ふ。「それは瘡病さへいとこそ申せ」。「又少し腹も痛みはべるは婆羅掲諦はらにてはべるか」と言へば、「それも落ちかねて久しく煩へば、後には婆羅僧掲諦はら そうぎゃてい<sup>65)</sup>になるものぞ。早く載薬きりぐすりを盛りたるが良きなり」とて、何は知らず粉薬こなぐすりを与へたるに、飲むより早く吐逆とぎやくして、病人氣を取り失ひ反張そりかへりければ、浮世坊肝うらみちを消し、閑道より逃げて足に任せて落ち行けり。

## 6. 経済的に見た中世医師

平安期及び鎌倉・南北朝の時代の医師は、旧態依然とした和氣・丹波といった典薬寮時代の医師あるいは僧医に牛耳られ、医薬の他に加持・祈祷の力に頼る有様であった。医師は当時の日本では方技の徒であり、官位も従5位以上には登れなかった。このような事情の中で、方技の徒ならそれらしく医の技術を磨いて世の中に出ようとする医師が現れたのは室町時代（1401～）からであると思われる。<sup>わめようるいじゅうしゅう</sup>〔和名類聚集〕（931～'38・我が国最初の分類体漢和辞書）では、医は士農工商の工に位置づけられ医術、医方は「芸能」であった。

少なくとも医の技術で収入を得るようになったのは、室町時代からであろう。嘉吉2年（1442）時の後花園天皇が癰を病まれた時、正確に症状を判断できる医師が無く、管領畠山氏のお抱え医師下郷（しものごう）が正確に病名を当て、針を用いて病気を治した。その時の謝礼は砂金30両であった（康富記）<sup>55)</sup>。100文で米1斗2升買える時代のことである。現在の金額で約1,000万円である。長享2年（1488）時の名医とされた竹田招慶は、時に宮中に上がってその謝礼として銭2,000匹をしばしば貰っている。これは文では20,000文になり米1石650文の頃である〔おゆどのの上の日記〕<sup>109)</sup>。現在の金額で約300万円である。

公家で医薬に詳しかった山科教言<sup>21)</sup> (1328~1409) は、その頃盛んに薬を作り知人を診て薬を与えている。1回の薬礼は100文程度である。

ここでは、金の多寡を問題にするのでなく医師がやっと公的に医術で謝礼をとり自立できるようになったということを指摘しておきたい。恐らくこの頃の医師は年間200人程度の患者を診て銭2,000匹位の収入があったと考えられる。応永3年(1396)100文で米1斗2升3合が買えた。25石弱の収入であり、1人年間1石あれば過ごせる計算であるから10人家族でも十分生活できた。外郎の患者は公家ら上流階級で、恐らくは前述の竹田氏位の収入はあったと考えてもよいのではなかろうか。

その一つの例として京都に祇園会の山鉾の一つに蠮螋山がある(29頁図参照)<sup>130)</sup>。これは「とうろうやま」と読み、今はそれを出す町を蠮螋山町<sup>注2)</sup>と呼んでいる(28頁地図参照)。蠮螋とは漢語で「かまきり」を意味する。「いぼじり」ともいう。この山は応仁の乱を挟んで祇園会に参加し、[祇園会山ほこのこと]<sup>127)</sup>には、前祭りに「一、かまきり山、四条西洞院と錦小路間」と出ている。又[祇園会山鉾次第]<sup>126)</sup>明応九年(1500)には「三番、いぼじり山、錦小路西洞院、四条ノ間也、」と出ている。これらの山は、大体応永の末(1420頃)にできたものであろうという。この趣向は、[祇園会細記(1756)]によると「蠮螋が斧を以て隆車に向ふごとしの古こと也。蠮螋作知らず胎内に一物あり、神躰と云。是を知るものなし」とあり、御所車の屋根に緑の大蠮螋がかぶさり、羽をはたはた動かすカラクリをみせる。

同書による江戸時代の意匠は次のごとくである。「蠮螋(もへぎ片色にて張屋台の上へのせ、手羽車やたいの内より使う)屋台(花色にしき桐にほうわうのもよう。四方に小簾。緑は紅羅紗。あふひかつら、あげまき有。前の方簾の上の所に花色じゅす。雲に鶴の縫あり。簾まき上げ下にこんびろうど、竜立わき金糸唐ぬい、其上に几帳のごとき飴真紅等有)<sup>ながえ</sup>轆(茶色てうせん錦にて張る。けまん真紅綱等あり)出し詣(白ねり)車(黒じゅす。えやう白じゅす。矢權

黒塗金もの)山之縁(波に千鳥金めっき彫すかし)水引(をり物模様夕がほ)幔幕(五色羅紗)見送(地こんぴろうど虎溪の図。人形鹿から松土橋等あり。唐縫紅羅紗金糸竜の縫)」(29頁図参照)。応仁の乱前、同じ山の観音山の修造に69貫文、現在の金額で約700万円かかったというから、山その物の建造には数百貫文、数千万円を要したであろう。

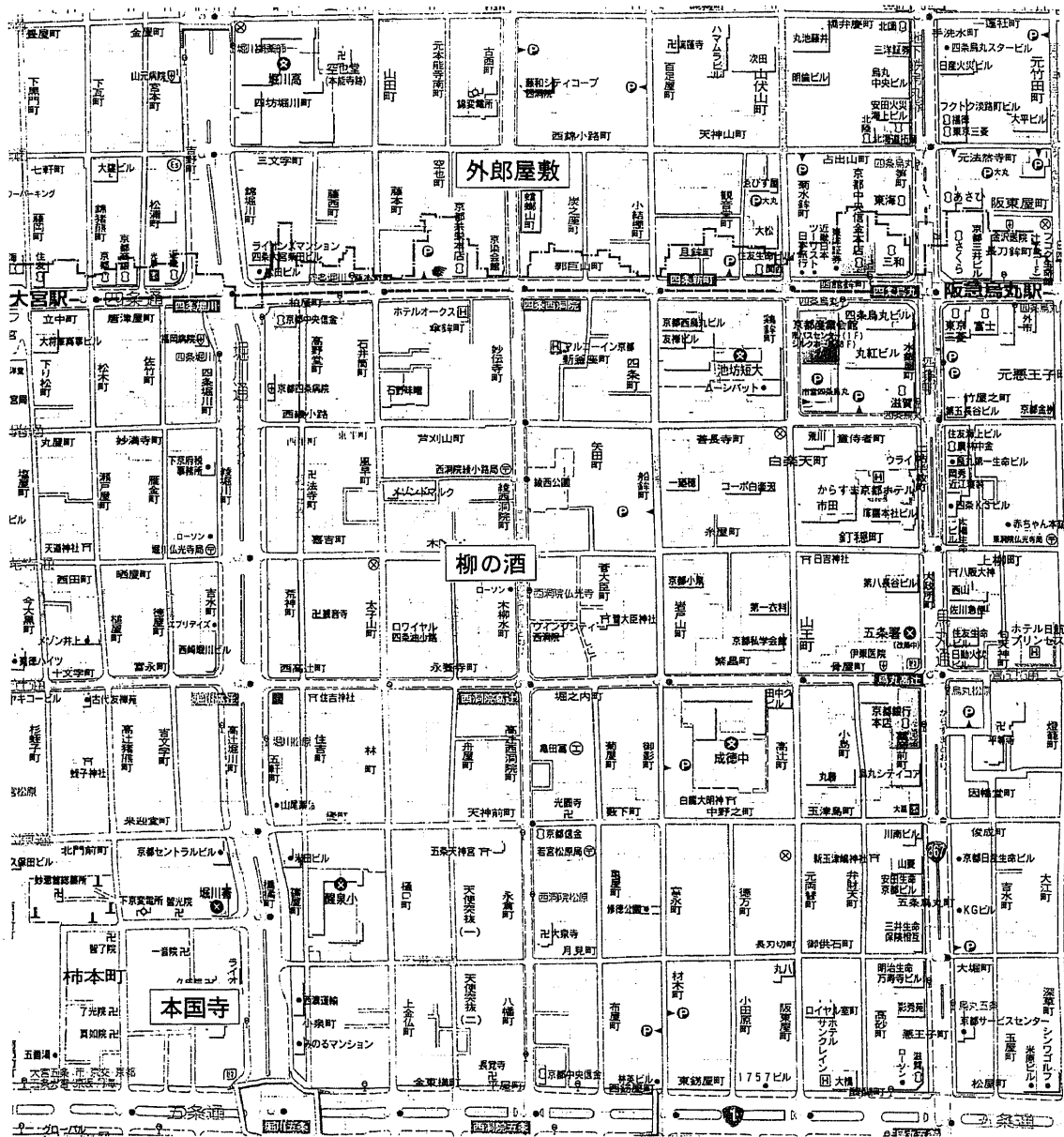
ところでこの町には室町から近世にかけて外郎の屋敷があり<sup>128)</sup>、近世初期の地図には、外良ノ町とある。著者の推測では始めの頃この「外」を「うい」と読めず「と」という人が多く、従って「とろう」を「とうろう」と読み替え、これを蟻螂と漢語にし、外郎が大スポンサーになってこの山ができたと思われる。外郎家の家譜によれば月海常祐か祖田の時代で、彼らがいかに医師と薬で財をなしたかをうかがい知ることができる。

## 7. まとめ

外郎の開祖陳順祖が日本に渡来したのは、一族の陳友諒が明の大祖に反抗して殺されたためである。応安初年(1368)から約200年間、外郎は医師として栄えた。しかし近世初期には薬屋に転業した。中興の祖祖田は幕府の医師となり法眼を称した。中世の外国人殊に医薬に関係する人達が、日本人から高く評価されたことが考えられる。

外郎医師は、時代的に中国の金・元の医家達から影響を受け李・朱医学の洗礼を受けていたと思える。彼らの医学的思想の根底をなす陰陽五行説や運氣説は、物理的な要素還元論で大宇宙を説明するには有効でも、人体の生物学的現象に当てはめるには無理がある。従ってそれに伴う薬効論は、現実的には余り有効ではなかった。

近世初期の医師の活動を、少し滑稽ではあるが假名草子・浮世物語より描写してみた。一部の傑出した医師は別であろうが、多くの医師はこのような状態であったように考えられる。収入は相当あったと推測される。



京都関連地図



螳螂山 129)

## 第2章 薬業家としての外郎

### 1. 京外郎の薬業家への転身

京都における外郎は、16世紀の半ば頃から医師としての活動を止め薬屋に転身したようである。この頃からの文献には外郎医師の表現が全く見られず、近世初期の〔買物調方記〕には医師の欄に外郎がなく、名薬所としての欄に外郎とうちん香が見られる。外郎末期の当主である外郎右近にいたっては、蹴毬に打ち込んで遠流になった。家は番頭にでも任せて結構繁盛していたかもしれない。外郎は虎屋という薬屋だった。

事実この頃から〔言継卿記〕<sup>54)</sup>や〔多聞院日記〕<sup>52)</sup>に京都、奈良、堺などの薬屋の記事が非常に多くなり、例えば〔雍州府志〕<sup>5)</sup>に次のような記事が見られる。「俗薬品未經剉刻謂木薬近世薬店主擇真偽精麤法製而剉刻之篩之応需而買之元雖不及医家修治又於草医甚得便中華所謂見成薬之也今所々有之是称成薬屋又近世市中庶称虎屋藤屋者製丸散之薬而売之庶人得其便」すなわち薬屋が木(生)薬を医師に替わって、真偽・精麤(上, 中, 下)を見分け製剤する。これは一般の医師にとって大変便利である。尚、成薬店は、一般に周知の薬剤を丸・散の形で売ってくれ、これも庶民にとって非常に便利である。その薬屋の名前は虎屋・藤屋というのが多いとも述べている。

これらの薬屋は、看板薬として例えば透頂香を持ち、他に50から100方の製剤を作っていたらしい。生薬を薬種として売っていたのは当然である。ところで高価な人参・甘草・麝香・竜腦といった生薬はいわゆる唐渡りの商品で、これを扱う唐人は大変歓待された。外郎はその意味で有利な立場にいたと思われる。

### 2. 狂言・「唐薬」<sup>56)</sup>に描かれた中国人薬業家のプロフィール

室町期に医薬に携わる唐人が尊重された例として、狂言〔唐薬〕にその雰囲



気が良く出ているので紹介する。唐人に化けて薬種を売りつけようとしてばれてしまい散々の目に合うという筋書きである。

△シテ『この辺りの者でござる。それがしことのほか、手前まづしうござるによって、他国をいたそうか、ただし淵川へでも身を投げようかと、とつおいつ分別をいたすところに、またここに常々心易う話すものがござるによって、まずこれへ参って、一相談いたしてみようとぞんじて罷りいでた。まづいそいで参ろうと存ずる。何とそれがしのわざわざ参ってこの訳を申しても、合点をいたせばようござるが、もし承引をいたさねばいかがでござるが、さりながらまづあれへ参って面白おかしう申しないて見ようと存ずる。いや行くほどに、これじゃ。ものもう。案内もう。宿におりやるか』

△アト『表にもものもうとあるが、案内とはたれぞ。ものもうとは』

△シテ『身どもおりやる』

△アト『そなたなら案内におよばぬ。通らしませいで』

△シテ『尤もとうりと思うたれども、もし人でもあればいかがじゃと思うてまづ案内を乞うておりやるは』

△アト『はてさて、固いことをいはします。又、只今は何と申しておりやったぞ』

△シテ『只今参ることべつのことでもおりない。我御料も知るとうり、それがしはことのほか手前不如意におりやるが、そなたはよいことでおりにやるか』

△アト『いや、それがしもおしやるとうり、ことのほか貧しうて、なかなかいとなみもならぬによって、我御料のところへ談合にいこうとおもうところへ、何とおもうておりやったぞ。よい分別でもおりやるか』

△シテ『よい分別のないでもなし、またあるでもないが、ここもとはことのほか、はし近なによって、おくへとうりたいが、誰か人はないか』

△アト『折節誰もないほどに、通らしませ』

△シテ『それならば通らうか』

△アト『まづ下にとうとおりやれ』

△シテ『心得た』

△アト『さて何ぞよいことでもおいやるか』

△シテ『いや、べつによい分別もおりないが、山ひとつあなたに矢田静右衛門というて、有徳人があるが、定めて知っておoryろぞ』

△アト『なかなか、静右衛門殿はそれがしは別して心易うおりやるが、それが何としたぞ』

△シテ『いや、その静右衛門殿の、ことのほか唐薬をほしがると聞き及うだが、定かでおoryるか』

△アト『なかなか、常々医心があつて、ことのほか唐薬を詮議めさるるが、それが何としたぞ』

△シテ『それについて、我御料はこの間見舞わしましたか』

△アト『いやいや、久しういかぬよ』

△シテ『それならば一段じゃ。そなたあれにいきやつて、この間久しうお見舞い申ませぬは、ご存じの如く手前不勝手にござるによつて、この間唐土で通辞をいたいておつてござれば、唐薬を商ふ唐人と同船いたいて、その土へ渡つてござるによつて、それゆえ久しうお見舞い申しましなんだとおしやれ』

△アト『さう言いたらば、定めて唐薬が自由であらうほどに、ほしいと仰せられうは』

△シテ『さらば其のことじゃ。さういわせられうならば、一段のことじゃ。それがしが唐人になつて日本の草木をしつらうて、唐薬でござるといふて、騙いて高値に売つて、その値を取つて、我御料とそれがしと、当所の住居になるようにせうと思ふが、これは何とおoryらう

ぞ』

△アト『これはよい分別ぢゃが、さりながら、そなたは異国のものの支度が  
できまいが、何とせうと思わしますぞ』

△シテ『其のことぢゃ。それがしのところへは、皆お若い衆の寄せらるる  
によって狂の装束が、何なりともおりやる。唐人を拵ふるは、自由  
なことでありやるよ』

△アト『それは一段のことぢゃ。それならば、それがしはあれへ其の訳を言  
わうほどに、そなたは姿を拵えてとてもことに、唐薬をもしつらう  
て、待っておりやれ』

△シテ『それならば、それがしは拵えてまっているほどに、首尾がよくば、  
それがしの方へ迎えに来ておくりやれ』

△アト『なかなか、迎えにいこうほどに、早う行きて拵えさしませ』

△シテ『心得た』

△アト『さらば、さらば』

△二アト『さてもさても、人の分別には奥のないものでござる。まず、あれ  
へ参って面白をかしう申しないて見ようと存ずる。さりながら、何  
とまことになされうか。もし、さうもなければ、それがし一人の迷  
惑になることぢゃが、しかし、口調法をもって申しなそうと存ずる。  
いや、行くほどに、これぢゃ、ものもう。案内もう。御家にござり  
まするか』

△二アト『表にもものもうとあるが、誰も出ぬかやい、案内とは誰そ。ものも  
うとは』

△アト『私でござりまする』

△二アト『いや、善五郎、我御料は久しう見えなんだによって、今日は人を  
もやろう思うところへ、何としてわせたぞ』

△アト『これは恭うござりまする。斯のぢう久しう参りませんだは、子細が

ござりまする』

△二アト 『それはいかようなことでおりやる』

△アト 『ご存じのとうり、私はことのほか手前不勝手にござりまするによつて、ふと思い立って、渡唐いたいてござる』

△二アト 『やあやあ入唐した』

△アト 『なかなか』

△二アト 『そのようなことならば、お知らせやらいで。なんぞ一役用に立とうものをいなう』

△アト 『恭うござりまする。度々お世話になりますれば、まづ、この度は沙汰なしに参ってござる』

△二アト 『それは、珍しいところへ行かしましたが、定めし変わったことをお見やったでおりやろうぞ』

△アト 『なかなか、まづ、あの方は、大国でござりまする』

△二アト 『さう、聞き及うだ』

△アト 『さて服国でござりまする。また、あの方には、様々変わったこともござるによつて、こなたをも、お供をしてお目につけたいことじゃと存じ出いてござる』

△二アト 『それは過分におりやる』

△アト 『さて、私もあれに参っていたそうことがござりませぬによつて、通辞をいたし覚えましてござれば、彼の唐薬を商ふものと、ことのほか懇ろになりましたの』

△二アト 『ほう』

△アト 『其の唐人と同船をいたいて参ってござる』

△二アト 『これは幸いなことでおりやる。そなたも知るとうり、それがしは唐薬を集むるによつて何と、ちと求むることはなるまいか』

△アト 『御尤もでござれども、さようのことは、ご法度でなりませぬよ』

△二アト『尤もぢゃが、さりながら、我御料の働で、少しなりとも欲しいほどに、世話をしておくりやれ。骨は惜しまぬぞ』

△アト『それほど思し召しませうならば、幸い今日異国のものが、私の方に参って居りまするによって、斯方へ連れて参りませうか』

△二アト『それは一段のことぢゃ。唐薬もほしう、また異国のものをみるも、珍しいことぢゃほどに、早う同道して呉れさしませ』

△アト『それなら只今、連れてまいりませう』

△二アト『早う連れておりやれ。まっておるぞ』

△アト『はあ、さても嬉しいことかな。それがしは手前不勝手にござるによって、今日は他国をいたそうか、明日は他国をいたそうかと存じてござるところに、権乃丞が参って、よい、分別をしてござるによって、あの通にほしがることではござる。なにほど高値にもとめらるるでござろう。さようにござれば、一幸せいたすことではござる。まづ、急いで連れて参ろうと存ずる。いくほどにこれぢゃ。なうなう、をりやるか〜』

△シテ『それがしを呼ばしますは、首尾は何とでおりやるぞ』

△アト『其のことぢゃ。ことのほか満足せられて、即ち唐薬がほしいとおっしゃるほどに、急いでおりやれ』

△シテ『それならば行こうか』

△アト『これはそのままの異国人でおりやるは。さて、唐薬の支度はようおりやるか』

△シテ『これこれ、即ちこれでおりやる』

△アト『それならば、それがしが持っているこうほどに、そなたは先にいかしませ』

△シテ『いや、案内者のために、我御料は先にいかしませ』

△アト『それならば、先に行くほどに、さあさあ、おりやれおりやれ』

△シテ『心得た』

△アト『なう、いうまではなけれども、必ず唐音でおりやる。日本の言葉を  
言わぬようにさしませ』

△シテ『さて、ほどは遠いか』

△アト『即ちこれちゃ。まず、それにお待ちやれ』

△シテ『心得た』

△アト『まおし、ござりまするか』

△二アト『いや、善五郎が参ったそうな。おりやったか〜』

△アト『只今参ってござる』

△二アト『何と、異国の人をわせたか』

△アト『其のおことでござる。いやと申したを、私のいろいろ口調方をもっ  
てまんまと連れてまいってござる』

△二アト『ああら嬉しや。これへおとうりやれ、とおしゃれ』

△アト『畏まってござる』(唐音にていう、シテも同返答)『はあ、この仁で  
ござりまする』

△二アト『初対面にござる』(シテ、唐音にて一礼する)

△二アト『あれは何ということでおりにやるぞ』

△アト『御尤もでござる。はじめてお目にかかって、恭いとまおす、一礼で  
ござりまする』

△二アト『尤もでこそおりやれ。さて、唐薬をほしいおりやるは』

△アト『其のとうりを申ませう。(唐音にてシテへいうシテも同断。さて、  
腰桶の蓋を空け、作物を出す)。は、即ち唐薬を差上ぐると申さ  
れまする。』

△二アト『なう〜、嬉しや〜。これはいかなこと。なう〜。これは唐薬では  
おりないぞ』

△アト『いや唐薬にまがひはございませぬ』

△二アト『いや～、これは日本にもある桜でおりやる。それがしの庭前にも、  
たくさんもっておるが、何の役にも立たぬものでおりやる』

△アト『はあ、それならば、承ってみませう。(唐音同返答) あれ、ご覧じ  
れい。唐薬ちゃと申して、立腹いたされまする』

△二アト『何ほど立腹せられても、桜でおりやるよ』

△シテ『いやまおし』

△アト『ああまをし、何ことをいわせられるぞ』

△二アト『これはいかなこと。只今申したは、まさしう和言でござるが、合  
点の参らぬことぢゃ。だまさるることではござらぬ。なう～、な  
にほどおしやっても、桜にまぎれはないぞ』

△アト『いや、唐薬でござりまする』

△二アト『いや、異国人からが合点参らぬ』

△シテ『何が合点参らぬ』

△二アト『やい、横着者よ』

△シテ『これは何となさるるぞ』

△二アト『何ということがあるものか。人たらしよ』

△シテ『真っ平許いてくだされい～』

△二アト『横着者よ。許すまいぞ～』

当時の日本人の唐薬への関心、要求の高さが、この狂言〔唐薬〕の中に浮き  
彫りにされていて興味深い。

### 3. 京都外郎の合薬（既製薬）

上述の如く薬屋ができ、種々の合薬（既成薬、売薬）が売られるようになった。例えば1454年成立の飯尾永祥の〔撮壤集〕に載せた薬剤類、1484～86年に記録された〔蔗軒日録〕<sup>45)</sup>の薬剤類、1637年頃に出た〔毛吹草〕<sup>44)</sup>に記され

た全国に渡る売薬など、その盛行ぶりが窺<sup>うかが</sup>える。外郎もこれらの合薬を、透頂香以外に沢山作って売っていたと思われる。

(〔撮壤集〕の薬剂)

蘇合香円，潤体円，至宝丹，靈宝丹，続命湯，姜活湯，護命湯，正気散，嘉禾散，養脾湯，洗々湯，理中円，建中湯，神稜丹，活虫円，排風湯，香蘇散，聖散子，青蒿丸，麝香丸，沈香円，地仙丹，肥兒円，惺々散，玄兔丹，三黄円，金露円，温白丸，竹石湯，益多湯，六一湯，集香湯，平胃散，勝紅円，妙香円，十補湯，七気湯，腦麝円，透頂香，五膈散，五噎散，解毒円，三稜丸，白伏散，阿伽陀円，人参順気散，烏薬順気散，八宝回春湯，西州続命湯，順気木香湯，十全大補湯，五香連翹湯，七味連翹湯，人参黄耆散，人参養栄湯，錢氏白朮散，無比山薬円，五疳保童円，耆婆万病円，菟絲子円，大金飲子，地黄煎丸，三五七丸，訶梨勒丸，十膈気散，鶯栗湯。

(〔蔗軒日録〕の薬剂)

胃風湯，鶯栗湯，回春湯，嘉禾散，加減助気散，加減節気湯，加減養気湯，加料松筋湯，観音応夢散，耆婆萬病円，羌活湯，驅蟲圓，解毒丸，牛黄圓，三味圓，紫金膏，至宝丹，十全大補湯，順気散，順解散，潤體圓，小続命湯，助気湯，真珠散，心身散，真人養臟湯，生气湯，清蕉散，心清圓，清心五養湯，仙家混元丹，蘇合圓，蘇合香圓，大兔絲圓，千葉膏薬，調気湯，調中湯，長命丸，通聖散，鐵刷湯，斬痰二陳湯，人参順気散，人参清神湯，人参養衛湯，敗毒散，鉢飯圓，八寶回春湯，平胃散，防己湯，木香流気飲，流気飲，龍虎丹，痢薬救丸。

(〔毛吹草〕の薬剂)

山城：洛陽典薬頭・屠蘇白散，半井・龍腦丸，延寿院・延齡丹，施薬院・牛黄清心圓，盛方院・鳳髓丹，竹田・牛黄圓，上智院・蘇香圓，兼康元康・齒薬，慶示右・太乙膏，慶雲意徳・萬応膏，同茄子薬，大蛇亮・産薬，道正・解毒，外郎・透頂香，大和：西大寺・豊心丹，河内：産薬，和泉：返魂丹，目薬貝。



摂津：鉞割阿仙薬。伊賀：目薬二ヶ所。伊勢：久志本・神仙丸。相模：透頂香。  
近江：混元丹，天隈・膏薬。紀伊：待乳・膏薬，大師夢想・目薬。

次に室町期に外郎が扱った薬剤について考察する。しかし大部分は名称のみで、その構成薬物及び効能などの不明なものが多いので、関連すると思われる薬剤を挙げその出典及び一、二の事項について記載し参考に供する。

### (1) 霊方丹

この薬は応永11年(1404)明より外郎宗奇が持ち帰り、幕府の倉中に収めた<sup>24)</sup>。

関連薬剤：霊宝丹。

記載文献：撮壤集。

関連文献：和剂局方<sup>66)</sup> 卷之一，治諸風。

### (2) 透頂香(とうちんこう)

とうちん香五囊幕府に献上 [長禄2年以来申次記・長禄2年(1458)12月27日の項]<sup>28)</sup>。尚五種芳薬(食薬・玉屑丸・龍麝円・透頂香・木香梨片散)が蜷川親元に進上されている [親元日記・文明13年(1481)1月7日の項]<sup>31)</sup>。その内容は不明だが、これが外郎の看板薬だったようである。このうち透頂香だけは成分・効能共 [刪補家伝預薬集]<sup>67)</sup>に以下の如く記載されている。

#### 成分

阿仙薬・丁子・甘草・白壇・石膏・蓬砂・龍腦・麝香等で丸薬である。

#### 効能

一切頭痛，めまい，たちくらみ，のぼせ，歯の痛みに付けて妙なり。

透頂香の主薬である阿仙薬(カテキュー)は、元の飲膳大医、忽思慧が編纂した [飲膳正要]<sup>68)</sup>に初めて「孩児茶」<sup>がいじちや</sup>の原名で収載されたものである。  
<sup>がいじちや</sup>孩児茶，<sup>うたでい</sup>烏爹泥はカテキンの多い細茶を竹筒に入れ両端を閉じ、泥中で発酵させ重合させた物で14世紀初期の中国での阿仙薬の偽物である。これはマメ科のアカシア カテキュー(ペグ阿仙薬)であるという説もある<sup>1)</sup>。元の時代には海外との交渉が盛んでベトナム，インド，アラビアあたりから生薬が沢山入っ

てきた。マルコ・ポーロによるとインド東南部海岸で見かけた多数の中国船舶がたくさんの薬材を積んでいたと記載している。

元でも1292年「回回薬物院」を設けてその普及を図った<sup>註4)</sup>。日本で阿仙薬を主剤に用いたのは透頂香が最初である。

普通、薬用で用いる阿仙薬(45頁参照)と呼ばれるものは、アカネ科のウンカリア ガンビールの葉及び若木(45頁参照)の煎汁を煮詰めたものでその主成分はカテキン (3, 40%) 及びアセンヤクタニンであり、どちらもポリフェノール化合物である<sup>68)</sup>。独特の香気と味を持ち、この生薬は古くなるほど爽快・美味になり値段も違うということである<sup>131)</sup>。阿仙薬の偽薬・百薬煎の主剤である五倍子の主成分もガロタンニン (ポリフェノール) で、立体構造のとり方によっては酸化鉄とかなり複雑で強固な錯体 (キレート) をつくる。これは後述のお歯黒の原理である。その化学構造式は、未だ研究中で確定していないという。阿仙薬、百薬煎はエキス剤で、漢方では膏と呼び固形ないし半固形である。

関連薬剤：透頂散。

関連文献：類証普濟本事方，宋代許叔微選。治一切頭風。

### (3) 食薬

関連薬剤：消食散。

関連文献：和剂局方，大能進食悦。

### (4) 玉屑丸

関連薬剤：玉屑膏。

関連文献：三因極一病證方，宋代陳言選。治五淋溺血。

### (5) 龍麝丸

関連薬剤：龍麝聚聖丹。

関連文献：衛生宝監方，元代羅天益著，治心脾客熱。

### (6) 木香梨片散

関連薬剤：木香散。

関連文献：①類証普濟本事方，宋代。②大平聖惠方（992），

③和剤局方，治隔年痢，血痢。

（7）潤体円

[蔗軒日録・文明18年（1486）3月13日の項] に外郎が中風に潤体円を投与したとある。関連文献：和剤局方，卷之一，治諸風。

（8）大初快気湯

亀泉集証に外郎，大初快気湯を与える [蔭涼軒日録・長享2年（1488）12月17日の項] とある。

関連薬剤：快気湯。

関連文献：和剤局方，卷之三，治一切気疾。

関連薬剤：快気散。

関連文献：丹溪心法（1481）一切の気疾，心腹脹満，宿酒不解，不思飲食を治す。

（9）大初平胃散

外郎亀泉集証にこれを与える [蔭涼軒日録・延徳2年12月20日の項]。

関連薬剤：平胃散。

関連文献：①陳言選，三因極一病証方論，卷之八，脾胃経虚実塞熱証治。（1174）。

②和剤局方，卷之三，治一切気附，不思飲食，心腹脹痛。

（10）長命丸

外郎集証にこの薬剤を持参 [蔭涼軒日録] 明応元年（1492）正月16日の項]。

記載文献：蔗軒日録，P37，P123，P194にその名称が散見される。[おゆどのの上の日記] 文明18年7月18日（1486）にも見られる。

[盲聾記]<sup>69)</sup>によると遠志など8種の薬種からなり，疲労回復に用いる。

関連薬剤：長生不老丹。

関連文献：中国医学大辞典<sup>121)</sup>，滋陰，健脾，養血，補気，黒髪，固齒，延年。

(11) 珍珠散

外郎，三条西実隆に上記の目薬を持参 [実隆公記・永正6年（1509）11月19日の項]<sup>35)</sup>。

関連薬剤：真珠散。

関連文献：①和剂局方，卷之六，治積熱。②治準繩方，明代，治眼翳膜，赤澀疼痛。③馬島眼科処方，室町期。

同様実隆に鼻口に付け年中の疫を防ぐ薬を進呈している [実隆公記・永正9年（1512）5月5日の項]。内容不明。

外郎被官宇野藤五郎，中御門宣胤に薰衣香，蘇香円，潤体円，牛黄円，珍珠散，透頂香などを持参 [宣胤卿記・永正14年（1517）5月2日の項]<sup>46)</sup>。

(12) 薰衣香（くのえこう）

種々の香料を衣に焚きしめる香薬。あまりに有名であり説明を省く [広辞苑を参照]。

(13) 蘇香円

関連薬剤：蘇合香丸。

関連文献：和剂局方，結核・肺痿を治す。

関連薬剤：蘇合丸。

関連文献：洗冤録方（1247）辟悪気。

(14) 牛黄円

関連薬剤：牛黄丸。

関連文献：①太平聖恵方（992）。②小兒薬証直訳（1119）。小兒五癩を治す。

(15) 妙香散

最近の小田原外郎家伝の中見出しにこの薬の包装がある。昔から売っていたものであろう。今の精神安定剤である。

関連文献：①蘇沈良方，宋代。沈括著。②和剂局方，辰砂妙香散，治諸虚，③紹興統添方，宗代。④奇効良方，王荊公妙香散，明代，方賢選，

安神，閉精，定心氣。

(16) 清心円

[蔗軒日録]<sup>45)</sup>に外郎は熱有る者に清心円を与たとある。

関連薬剤：清心丸。

関連文献：丹溪心法（1481），治諸虚。

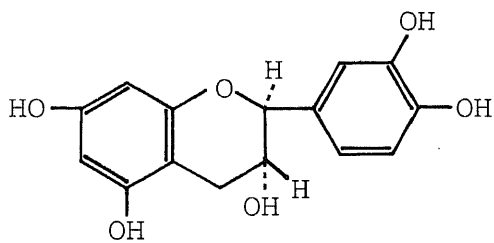
#### 4. まとめ

15世紀末から16世紀初頭，成薬店という商売が盛行した。一般の医師はそこから薬種を買い，庶民はそこで合薬（既製薬・売薬）を買った。外人（主に中国人）の薬屋は特にもてはやされた。外郎が処方し，販売したと思われる薬剤を列挙し概説した。

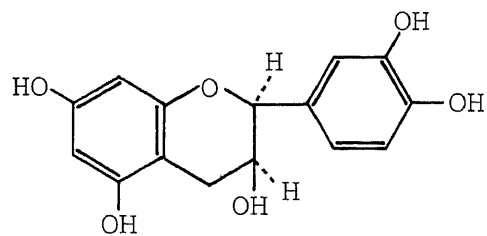
寛正（1460）から明応（1500）にかけて [蔭涼軒日録] などに出てくる外郎祖田らの薬の投与例から見ると脳梗塞いわゆる中風とか結核，胃腸の病気，情緒不安定，目の病気などが多い。又多くの製剤は [和剂局方] に従って造られたことがわかる。しかし五種芳薬の如く内容の良くわからない薬もある。



Uncaria gambir  
阿仙薬



*d*-catechin



*l*-epicatechin

ウンカリア ガンビール成分の化学構造

### 第3章 小田原外郎の成立

#### 1. 戦国期特権商人

戦国時代の特徴として、経済面での飛躍的発展がある。戦国大名は富国・強兵につとめ、金・銀の生産、特産品の販売、新田の開発に力を入れて生産力の増大を図った。例えば我が国の水田面積は、室町初期に94万町歩であったものが、戦国時代の末の慶長頃（1596～1614）には一躍163万町歩に達したという<sup>111)</sup>。

同時に戦国大名は中央の京都、奈良、堺などと結んで鉄砲など武器輸入に努力した。尚各地の大名の動向、特に京都の情報を入れることにも努力を払った。

これら時代の要求に応じて登場したのが戦国期の特権商人である。彼らは免税・駅馬の自由を受けることの引き換えに、領国内の商人の取締りや町の統制、中央からの情報・連絡に当たり、又武器輸入の仕事に携わった。関東・東海では今川家の松木氏や北条家の外郎・宇野氏、織田家の伊藤氏らが有名である。彼らは半手と称して幾つかの大名とも同様の関係を持つのが普通であり、一朝ことある時は侍の身分で働いた。

#### 2. 小田原外郎の出自について－江川家との関連（1）

[外郎家譜]<sup>10)</sup>に「祖田に子二人あり、兄は藤右衛門尉定治、弟は名前不明、定治は宇野氏（宇野七郎親治の裔なり）の義子であり、因って氏を改め宇野と称す」とある。[松窓漫録]<sup>18)</sup>の中で関 修齡は「常祐の子童形の時、將軍義政命じて大和源氏宇野氏の継とす。後加賀守方治と称す。家伝に、文亀元年（1501）前述の加賀守方治及び宇野修理進興治が書等を蔵せしが災に罹るといふ。永正の初め、方治の孫藤右衛門定治、北条早雲に仕え、小田原城下に住す」といい、尚 [小田原北条記] を引用して「透頂香は鎌倉建長寺僧大覚に従って渡来せしもの」と述べている。[関八州古戦録] の榎島昭武も同様のことを言っている。しかし著者は次のような理由からこれらの伝聞が後世に作られたものであると

推察する。

1) 祖田の系統を詳しく紹介した [幻雲文集]<sup>3)</sup> に宇野方治の記載がない。  
2) 同様に, [蔭涼軒日録]<sup>24)</sup> にも紹介されていない。3) 関 修齡らは小田原外郎に家伝として聞いているが, 経過が家譜の示すところと全然異なり, [家譜] に信憑性がない。4) 方治がまだ生存していたであろう永正14年5月12日(1517)に外郎被官(家僕)宇野藤五郎(後の藤右衛門)なる人物が公家社会に登場している。同月15日には, 中御門宣胤から駿河今川家(宣胤の娘は今川氏親の内室)への贈り物を預かるとの記事があるので<sup>46)</sup> このころは宇野藤五郎は今川家の御用商人であったと考えられる。5) 享禄4年(1531)7月5日には近衛尚通を宇野藤右衛門(定治)が訪問し, 北条氏綱との連絡をとっている<sup>36)</sup>。このころは既に宇野氏は北条家の御用商人になっている。ちなみに氏綱の後妻は尚通の娘である。6) 同年9月13日伊豆の宇野の妻女が土産を持って尚通を訪ねている<sup>36)</sup>。従ってこのとき宇野の実家は伊豆に在ったと考えられる。

よって宇野方治は伊豆の宇野定治のことで, 宇野方治説は小田原外郎の創作であろうと考えられる。

ところで伊豆の名家江川家(宇野)は, 鎌倉時代からの家柄だというのが<sup>100)</sup> 鎌倉幕府の正史と見なされる [吾妻鏡]<sup>70)</sup> には宇野も江川も出てこない。[小田原北条記]<sup>14)</sup> の早雲が韭山に茶々丸を攻めた時の記述にも両方の名前が出てこない。著者の調査では [快元僧都記]<sup>71)</sup> に天文初年鶴岡八幡宮の造営奉行をした鶴野筑後入道という人物と, 秀吉の小田原攻城戦で佐野氏忠と水之尾口を守った宇野某<sup>72)</sup> だけである。戸羽山 瀚氏は<sup>100)</sup> 源為義に二子ありとし, その一人多多良義春が江川荘を領したというが, 保元の乱(1156)で為朝を除いて五人の子息は悉く義朝に殺されている。江川荘という場所も正規の文献には見あたらない。韭山城攻防戦における江川曲輪と江川氏の戦いぶりなどは文献的に不明である。両家の先祖については, 室町期以前では全く不明である。仲田正之



[江川坦庵]<sup>73)</sup>によれば、[太平記]<sup>74)</sup>に出てくる宇野能登守国頼が19代国俊であるというが、ここでの宇野氏は播磨の国の豪族・赤松氏の一族で、宇野頼定の子息であることは専門家の間では周知のことである。又、20代英房とその子治雅は、[長祿記]<sup>75)</sup>にいう江川入道・同新左衛門に当たるとするが、これも河内の豪族<sup>ごうぞくこんだし</sup>譽田氏の若党であることは明白である。尚26代英元が天文6年(1637)氏綱と共に国府台に里見氏と戦って5000石を拝領したというが、証拠がない。永祿2年(1559)成立とされる<sup>おだわらしゅうしよりょうえきちよう</sup>[小田原衆所領役帳]<sup>76)</sup>にも江川…30貫文とあるだけである。又、千利久が江川家の邸内の[葎山竹]をとって花筒を作ったというが、各種文献に江川邸内という記述は見られない。他にもお万の方(家康の側室)を小田原攻めの時に、江川氏が家康に勧めたというが、お万の方はこの時10才程度で幼なすぎる。又、敵の大將に養女を勧める程英吉(当時の江川家の主、52頁江川家譜参照)に余裕があったとも思えない。

ところで江川(宇野)氏は中世から近世初期にかけて有力な酒造家で、その江川酒は有名であった<sup>101)</sup>。周知の如く15、16世紀は酒造法が非常に進歩した時期である(三段掛け、火入れ法など)。宇野氏は恐らく播磨の国人で、北条早雲が伊豆に入った頃京都(恐らく柳の酒屋)でその酒造法を習い、英盛、正秀兄弟の頃(1470~1525位)、早雲に臣従し三島に住んだ人達だと思われる(江川系図52頁参照)。酒造を行いながら武士としても働き、その息子(久治=定治)も京都で外郎に被官として勤め、親と同時に三島に移住し、彼らが居着いて「宇野」という地名ができたと考えられる。

その証拠の一つとして京都の本国寺、三島の本覚寺及び小田原の玉伝寺(起立はやはり京本国寺系の日伝-身延13世)の日蓮宗総本山身延山での宿坊は、覚林坊といい、三寺が同宿なのである。京都で働いていて日蓮宗であった宇野氏、三島に住んだ宇野氏、大永2年(1522)玉伝寺を小田原に開いた[外郎文書]<sup>77)</sup>宇野氏がここで繋がる。このように考えればやがて京都の外郎の被官をやめて、天文年間北条氏綱に仕えた小田原外郎(宇野氏)の出自が理解できる。

一方、江川氏の菩提寺本立寺は、江川氏が葦山付近に何らかの関係ができた頃造られたもので、それほど年代は古くないと思われる。[本山葦山本立寺誌]<sup>78)</sup>によれば永正3年(1506)、僧日澄<sup>にっちよう</sup>によって開かれるとしている。面白いことに日澄は、京都本国寺から出た人で1499年、多分江川英盛、正秀兄弟の頼みで三島に来て円明寺を開き、それから英盛に頼まれて本立寺を起立している。推測を逞しくすれば宇野氏は、三島に来て酒造をし、葦山城の北条早雲の頼みで文亀-永正(1501~'21)の頃に金谷村に屋敷を貰って移住し、酒造したとも思われる。ちなみに筋からいえば本立寺は京都本国寺末である。宇野の息子の方は、北条氏綱に従って虎屋外郎として小田原に住み着いた。

次に外郎・江川両宇野氏が住んだ三島神領(52頁参照)について考察する。[吾妻鏡]<sup>79)</sup>に治承4年(1180)10月源頼朝三島社に御園、川原谷、長崎の三邑を寄せ、又元暦2年(1185)4月糠田郷を付加するとの記述がある。[小田原衆所領役帳]<sup>76)</sup>には、又、三島領78貫文とある。徳川家康は、文禄3年(1594)と慶長9年(1604)の2度に亘って一丁田、沢地、幸原、河原ヶ谷、社家五村において530石の田録を付した[増訂豆州志稿]<sup>80)</sup>。

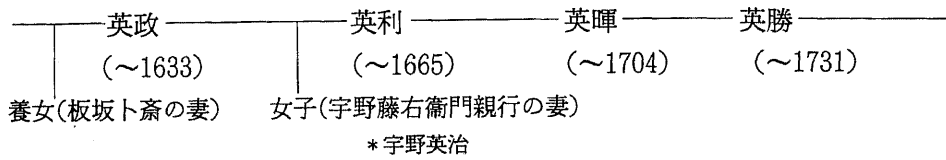
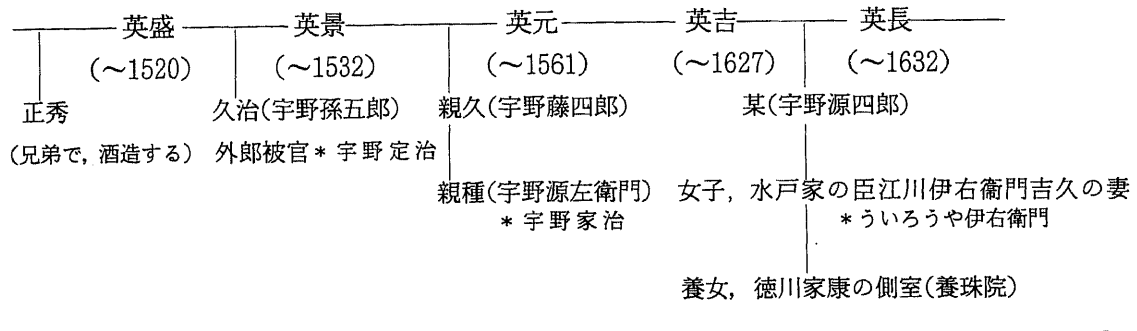
東大資料編纂所々蔵の[豆州三嶋御神領宇野御繩打水帳]<sup>ずしゅうみしまごしんりょうのおなわうちみずちょう</sup>、[豆州三嶋御神領神川御繩打水帳]<sup>かんがわ</sup>、[豆州三嶋御神領賀古御繩打水帳]<sup>かこ</sup>{文禄3年(1594)7月}にそれぞれ田畑11町3反5畝15歩、18町、8町9反が記載されており、帳末に330石の記載がある。検地代官は、伊奈熊蔵、矢野五郎兵衛尉、江川民部丞、彦坂小刑部代である。これを今の土地に当てはめれば、宇野は幸原から岩崎の辺、神川は神川から天神原にかけて、賀古は賀古川・河原ヶ谷から祇園原にかけてであるように思われる(52頁地図参照)。このことが三島市史などに出でてこないのはどういう訳であろうか。

[三島町誌]<sup>102)</sup>によると、中世の東海道は黄瀬川の宿を経て伏見新宿を通り、若宮八幡辺より小浜を経て一町田に抜け元山中に至ったとしている。この当時の三島宿は三島大社の北側にあり今の宿場町と異なっていたと思われる。これらが事実とすると御神領の宇野は中世の三島宿の中心に当たり、そこに酒屋があっても不思議で

はない。そして、江川家は京都からこの宇野に移住したものとして理解できる。又外郎の宇野もここに京都から移って来たものと考えられる。結局両者は、三島神領・宇野に土着した宇野親子であると思われる。親は北条草雲に仕え、子は北条氏綱に仕えた。ちなみに早雲は畿内の多くの職人を東国に招き、自分の居城・葦山城の近くに住まわせている。その中には製材師、鍛冶、石切、皮革職人、螺鈿師、刀の鐔師、縫物師、金銀細工師、唐帟師、紙漉などがある<sup>76)</sup>。宇野親子の様に酒造家、薬屋がいても少しも不思議ではない。

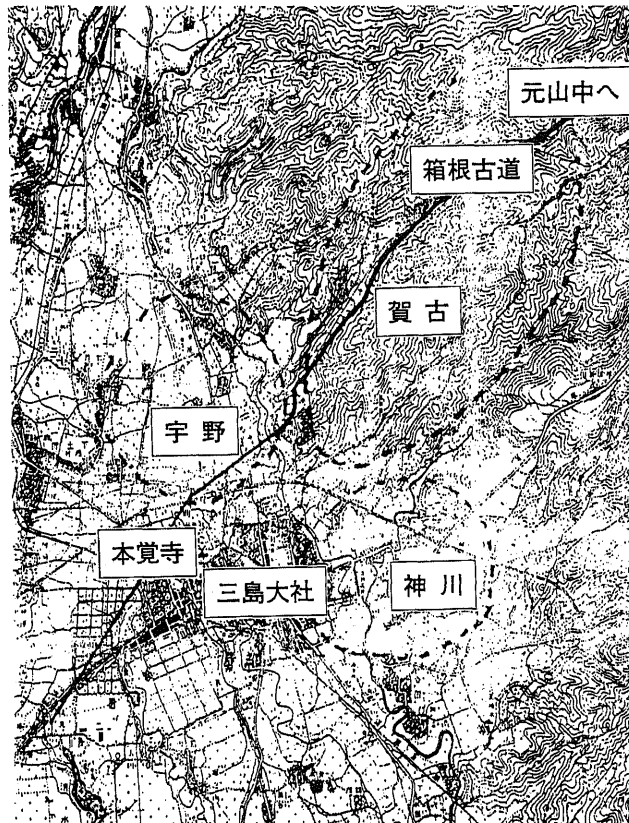
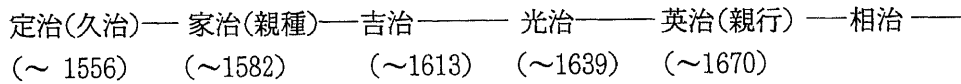
### 3. 小田原外郎の出自について－江川家との関連（2）

江川系図(寛政重修家譜)<sup>79)</sup> 代々太郎左衛門を名乗る。



\* 推定

小田原外郎系図(外郎家譜)<sup>10)</sup> 代々宇野藤右衛門を名乗る。



三島神領の分布

江川（宇野）家から小田原外郎（宇野）家が発生したのは〔江川家譜〕<sup>79)</sup>によれば江川英景（天文元年－1532死す）から江川英元（永正9年－1512より永禄4年－1561）の代、すなわち永正年間（1500年代）から天正年間（1600年代）の100年の間であると思われる。しかし寛永頃（1640位）英利の妹が宇野藤右衛門親行に嫁している。以下に小田原外郎の家譜に沿って宇野定治から英治迄の略伝を述べる。

#### （1）宇野定治（～1556）

江川英景の弟・宇野久治に擬せられる。永正から弘治にかけ、外郎の被官として、又今川家、北条家の御用商人として活躍し、松山筋を領した<sup>76)</sup>。〔外郎家譜〕<sup>10)</sup>によれば大永3年（1523）右京亮（律令制官庁の次官）に任官したというが、北条氏綱がこれより遅く天文年間朝廷に金品を提供して左京大夫（律令制官庁の長官）に任官されたことを考えると信じがたい。寧ろ氏綱から享禄3年（1530）諸役免除の判物を得たということの方がとおりやすい。

#### （2）宇野家治（～1582）

家治（源左衛門、源十郎）は武州今成郷を領した<sup>76)</sup>。この人は江川英元の兄弟、宇野源左衛門親種であろうと思われる。

#### （3）宇野吉治（～1613）

親種の子が吉治（源十郎、藤五郎）で、小田原の今宿町奉行となる<sup>112)</sup>。永禄6年7月（1563）氏康は諸役免除の証を与え、又常に伝馬三匹を賜い、駿河の今川氏、甲斐の小山田氏も駄馬を給した。ういろを古河公方（足利藤氏）に献じている。

#### （4）宇野光治（～1639）

次が光治で藤八郎ともいう。武州荏原郡高幡郷（1580）、上野新田領（1586）、館林田島郷（1587）を領す。天正4年（1576）日光における透項香独占販買権を得る。侍の身分をもつ完全な中世の特権商人である。天正18年（1590）秀吉小田原攻めの時、北条氏忠と水之尾口を守った宇野某というのはこの藤八郎光

治だと思われる。

#### (5) 宇野英治 (～1670)

光治の子は英治である。この人が最後に江川家より嫁（英利の妹）を迎えた宇野藤右衛門親行であろう。尚天文中期(1540頃)上杉憲政に近づき、天正3年(1575)武田家に移り、上州松井田に居を構えた外郎源七郎は江川英元の弟親久で天正8年(1580)その後を継いだのは、先述のごとく、その弟親種<sup>84)</sup>である。松井田外郎の子孫は親久の系統であろう。外郎の一族には武田に仕える者も多く、その一人が武田滅亡後禅定院日心と称して甲州奈良田に外郎寺(天正10年-1582創立)を建てたと思われる、当時奈良田は、甲州から伊奈、高遠に通ずる要所であった(西山村村誌)。

その後外郎(宇野)家が京都本家と分かれ(もとより北条家の特権商人であったが)完全に小田原外郎として成立したのは、[小田原北条記]<sup>14)</sup>(1673)にいうとおり、氏綱の頃小泉なる町奉行が推賞して取り上げられたもので(1520頃)、外郎(宇野)はこの時代から、虎屋という薬屋として小田原に定着したものであると思われる。それ以前小田原は全くの寒村で、氏綱、氏康の頃から城下町の形をなしたのである<sup>82)</sup>。小泉(意春)なる代官は中伊豆の式内社軽野神社の天文11年(1542)の上梁文にでてくる[増訂豆州志稿]<sup>80)</sup>。上記のことは[東海道名所図絵]<sup>81)</sup>秋里籬島(1797)や、[貞丈雑記]<sup>17)</sup>(1843)などにもいうところである。

なお小田原外郎家の家宝に、古瓶があるという[書かれない郷土史]<sup>83)</sup>が、これが酒壺ならば近世始めに酒屋をしていた江川家との関連を知る上で興味深く、今後の検討が待たれる。

#### 4. 補論・江川伊右衛門のこと

江川家譜によれば英長(～1632)の妹が水戸家の臣江川伊右衛門に嫁しているが、寛文規式帳<sup>115)</sup>(寛文9年1669成立・水戸家家臣帳)に江川の名前がな

い。ところで [二川随筆]<sup>113)</sup>に貞享年中 (1684~'87) 大磯の嶋立沢に立ち寄ったところ、80ばかりの僧がいて若い時成田左馬助に仕えたが (下野烏山を領した成田家は元和8年・1662廃絶)<sup>116)</sup>それより浮世を捨てここに庵を結ぶとある。この人は姓は橋本、小田原の人で寛文初年大磯に隠棲し西行遺跡を復興、孤峰崇雪と名乗り、貞享3年 (1686) 没した。

この庵を元禄頃の俳人大淀三千風が譲り受けた時の小田原よりの書状<sup>114)</sup>と庵の什物を引き継いだ折の受領証がある。

請取申什物之覚

一雅章卿御短冊 壹枚

一西行画像 壹軸

一沢庵筆 壹軸

右三色確カニ請取申候ため其如此候

元禄八年

亥五月十二日 三千風印

うい□□や

伊右衛門殿

この「うい□□や」とは、完全に「ういろや」と読める。伊右衛門は、小田原外郎に関係があったものと考えられる。又この人は年格好から正しく江川家の江川伊右衛門だと思える。その証拠として三千風は談林派の俳人であるが、それほど著名ではないのに江川家の英暉 (~1704) と英勝 (初英隆~1731) が彼に師事し、漢詩や和歌を三千風の著書・倭漢田鳥集卷之上に寄せている<sup>117)</sup>。

古への秋の哀れはしられけり嶋立沢のけふの夕暮 豆州韭山江川氏 英暉

文車のくはらめく音に嶋たたん 豆州韭山江川氏 英隆

嶋立與秋暮 茅亭結構成 浮雲雙眼眼豁 流水一身軽 已遺西行跡 今知東往名 誰哉

呼子鳥 只有答松声 江戸上島 英勝

この本には当時有名な遊女“あげまき”，“小むらさき”らも投稿しており割

合庶民的なものである。これから見ても江川家・外郎の結びつきはこの頃まで続いていたと思われる。

尚飛鳥井雅章卿がういろうや伊右衛門の所に寄ったということは、小田原外郎は京都外郎と何の関係もないことを示している（52頁江川系図参照）。

## 5. まとめ

小田原外郎は、京都外郎の系統ではなく三島御神領の宇野という場所から出た北条家の特権商人である。しかも幕末有名な江川代官の宇野氏と同根である。両者は16世紀から17世紀に亘って分離した。江川氏は中・近世にかけて著名な酒造家であった。この当時の江川家は侍というより商人である。

小田原外郎は、初めから医師でなく、数々の合薬をもって小田原で商売した薬屋であり、本家と同じく虎屋という名前を名乗ったようである。外郎は関東地方で広く商売をした。当然北条家の認可のもと、各大名にも自由に通行を許され中央との情報交換と種々の物産売買、殊に武器の確保に活躍した。本章では、小田原外郎の出自に関して史実を踏まえて新しい見解を示し、それが京都外郎の系統でなく伊豆の三島御神領の宇野という土地の出身であることの推論を試みた。



## 第4章 江戸期の外郎について

### 1. 江戸期の外郎

小田原外郎の特徴は末期の京都本家（戦国末期には虎屋と称し成薬屋として透頂香を始め種々の薬を売った）と同じく、当初から虎屋と称し種々の薬を扱った。戦国末期には透頂香が有名になり、小田原外郎は最初から医師でなく、単なる売薬屋で通したであろうと思われる。外郎は種々の合薬を売っていたが北条氏綱に透頂香を、口臭を除き、眠気を去り、生命を延べる妙薬と勧めている<sup>14)</sup>。

当時、透頂香の主要成分である阿仙薬、麝香、竜腦などの薬は商人であれば容易に手に入るもので、透頂香に似た薬が透頂香としてよく出まわるのが実情であった。戦国期・江戸期では一般に薬業家は他人の薬を請け売りせず、成薬屋は何れの薬店でも50方から100方位の有名公知の売薬を自製して販売していたから、一層この傾向は強かったと思える。成書として「家伝預薬集」<sup>85)</sup>があり、その製造は簡単である。事実、1637年に出版された「毛吹草」<sup>44)</sup>なる俳諧の書に山城（京都）の名物に「外郎ノ透頂香」とあるが、相模（神奈川県）の名産には唯、「透頂香」とだけある。又大阪立売堀に「外郎とうちんこう」の店がある（1670）「諸国買物調方記」<sup>86)</sup>。又、例えば常陸の佐竹家の大和田重清という侍が、文禄2年（1593）名護屋に出張した折、長崎でこれら透頂香の成分の薬を容易に求めている「水戸市史」<sup>87)</sup>。このような例が全国に沢山あったのではないかと考えられる。

ういろいろの贋薬（原料が偽物なのか、処方が違うのか明白でない）が多かったので、寛永19年（1642）小田原外郎家の軒下に「ういろいろ」なる看版を出したという。尚、領主の稲葉氏は秀治の頃、慶安5年（1652）禁令を下して藩内の外郎の製造販売をやめさせているが、実際に効果があったのかどうかうかがい知ることはできない。

元禄元年（1688）には再び贋薬が出て時の領主大久保氏も禁令を出している。

外郎は、侍の身分を失ったあとも幕藩体制下で小田原18町の宿老として給米を貰い、藩の特権的薬商人であり続けた。町の統制と商権の大きいこともあり、江川家の応援もあったためと思われる。又、運上金の効果もあった。この頃には京都の外郎本家の方が衰亡していたから小田原外郎は、外郎の名を欲しいままにできた。元禄7年(1694)、8年と外郎は将軍に大久保氏を通じて透頂香を献じ喜ばれたという。その後、上州においても行商の便をはかって貰った[外郎家譜]<sup>10)</sup>。今でも群馬県の野良犬というところで外郎透頂香を売っている店があるが、その名残りであろう。諏訪市にも、外郎座なる地名がある。以上のように、全国各地に行商の名残りがある。英治の子宇野相治は薙髪して意仙と称した。その後意庵、蕪庵、以春、善甫、以春(1814年没)、以珊(1832年没)、鉄丸、藤三郎、精一郎、省三と続き、相治以来、町の宿老を勤めている[小田原のういろう]<sup>88)</sup>。

小田原落城以後の文献によれば、寛永7年(1630)9月3日相州当麻村市祭りが行われ、ういろう若衆21人が参加している様子がうかがえる[当麻村市祭たいまむらいちまつりおぼえがき覚書]<sup>89)</sup>。万治2年(1659)以降仮名草子[東海道名所記]<sup>90)</sup>が出版されたがここに「宿の右の方にういろうあり」との記述があるが、これ以前の道中記二種にはういろうの記事がない。寛永から万治にかけての20年間に店の新築資金ができたのであろう。又、貞享2年(1685)の文献[稲葉家引送書]<sup>91)</sup>に宿老外郎藤左衛門の名が見える。

小田原外郎は宣伝に巧みで享保3年(1718)二代目団十郎に芝居狂言[若緑勢曾我]を上演した時、外郎売りの姿をさせ透頂香の由来と効能を連ねた台詞せりふを早口舌、ねじり文句でとうとうと述べさせ、観客を驚かせた。単なる清涼・整腸剤を、口中の清涼感を利用して口臭をなくし、声をよくし、舌の廻りを良くする、というフレーズに変え民衆の習慣性を作り出す技法は極めて巧妙な宣伝方法である。というのは、この宣伝によりベテル・チューイング(透頂香の主成分である阿仙薬は、古来マレー系民族により嗜好料とされていたウンカリ

ア カテキュー、すなわちガンビール (Gambir) と称する植物のタンニン性エキスで、これを石灰乳とませ檳榔子の種子 (ベテルナッツと言いやシ科のアレカ カテキュー) の切片に塗り、キンマ (peper betlel L.) の葉で包んで咀嚼する風習がある} の習慣が<sup>68)</sup> 南方系人種にその起源<sup>134)</sup> のある日本人の外郎好きを強く定着させた。又早口で饒舌のせりふは、外郎が唐渡りの発音の妙薬であると強く印象づけた。

〔戦国期職人の系譜〕の中で、所喜夫氏は外郎の行商台詞が、中世以来の下層芸能集団の口承文芸と結びつき二代目団十郎がそれを芸術の域にまで高めたとしている [外郎売考]<sup>92)</sup>。江戸には、ういろうの売薬屋として元禄頃本町の益田隠居、ばくろ町の香具屋伝兵衛、山田屋伊兵衛、横山町の大和屋加兵衛、大和屋市兵衛などがみえる [続江戸砂子温故名跡志]<sup>93)</sup> が、これらの売薬屋のういろうが小田原外郎の取り次ぎか、自製のものは明白ではない。

李時珍の [本草綱目-1590] に出てくる五倍子の入った中国製百薬煎<sup>121)</sup> あるいは唐百薬煎をサルホ (猿胞) という。一部の阿仙薬製剤には猿胞を入れたものがあり値段が安いからであろう。

中世から幕末まで延齡丹、千金丹、万金丹、錦袋円などで阿仙薬が使われ、上野の錦袋円などは6年間で3,000両の利益があったといわれる<sup>122)</sup>。現在の金額で3億円弱である。いかにこれらの製剤が好まれたかが推察される。

ちなみに錦袋円でも初期のころ、猿胞が使われていた<sup>125)</sup>。又、透頂香にも一部猿胞が使われた<sup>67)</sup>。

特記すべきは元禄4年 (1691) ドイツ人ケンペルが江戸へ向かう途中小田原でういろうを見て次のように述べている [日本記事訳抄]<sup>94)</sup>。「コノ地ハ香気アル阿仙薬ラルラ ジャポニカノ生産アリ。彼等ハ是ヲ丸薬、小サキ偶像、花、或ハ其他種々ノ形ニ造リ美シキ小箱ノ中ニ入レテ売品トナセリ。此売品ハ特ニ婦人ニ愛用セラル是レ其ノ齒ヲ堅クシ、呼吸ヲ爽快ナラシムルタメナリ、此ノ濃厚ナル液汁ハ最初素地ノママ支那人又和蘭人ニヨリ日本ニ輸入セラレ京都又

ワ小田原ニ於テコレニ琥珀，ボルネオノ樟脳及ビ其他ノ諸品ヲ混ジテ精製セラレ，後彼等ワコレヲ買フテ，再度他へ輸出セリ」。

尚小田原の郷土史家，片岡永左衛門氏は次のように述べている，「是ハ透頂香ナラン。当時ハ丸薬ノミナラズ花外郎ト称シ，四方形，方形，凹凸ノアル形，板形ナドニ金銀箔ヲ飾リタルモ有リタリ。」古い訳文を使ったのは上記片岡氏の指摘に注目したからである。

訳者の間違いであろうがラルラ ヤポニカは“日本クスノキ”のことで，ケンペルはテルラ ヤポニカをラルラ ヤポニカと言っていると考えられる。なぜなら樟からは阿仙薬は採れない。又ケンペルのいう琥珀は，竜涎香（抹香鯨の腹部にできる結石：Amber gris）すなわち，「匂いの王者」といわれている物のことであろう。これを少量混ぜると，非常に良い匂いがする。ボルネオ産樟脳は竜脳のことと思われる。竜脳の代用薬としては片脳（精製樟脳）が使われた。

最近の訳文 {ケンペルー齊藤 信訳：江戸参府旅行日記，東洋文庫303，平凡社（1977）}によると，次のような表現になっている。「ここでは香りの高い阿仙薬を製造し，それを丸薬や人型・花型などいろいろの形にして，小さな箱に入れて売るのである。その薬は歯のぐらぐらするのをなおすと共に，口から良い香りが出るので，特に婦人は毎日それを飲む。オランダ人や中国人はこの煮つめた液を原料のまま日本に送り，京都や小田原で精製し，アンブラ（芳香を放つ興奮剤）や竜脳（樟脳の種類）やその他のものを調合して，それを再び仕入れて輸出する。」

花外郎・透頂香にはより強い抗菌力のある，例えば蘇芳のような生薬も使われたと思われる<sup>121)</sup>。

ケンペル<sup>95)</sup>は，日本からの貿易品目中に阿仙薬があり，それをCatechu oder Japanischen Erdeとし，後者を一般に日本泥と称しTerra Japonicaというと

している（そもそもヤパンとか、ヤポニカとかいわれる薬は輸入品の日本での精製物ともいえるが、和製阿仙薬の可能性も否定できない）。元来古くから日本でも中国でも五倍子を主剤とした百薬煎の出回ったのもその一例である。江戸初期（1637）の〔毛吹草〕<sup>44)</sup>に、摂津の産物として鉞割阿仙薬（恐らく百薬煎）が出ている。近年でも東インド、中国、東南アジア、オセアニアでもベテル・チューイングは盛んで小泉栄次郎の〔和漢薬考〕<sup>96)</sup>によれば、阿仙薬のことをベテルのもうひとつの主要生薬擯椰子の字をとって擯榔膏（和製阿仙薬）ともいっている。小泉氏は、この偽薬は薬舗菊屋、堺の酢屋、日野屋などで造り、主たる製法は五倍子に紅茶の朱を和し、蕨粉にて煉るとしている。

ここで重要なのは、小田原でも和製阿仙薬を造った可能性があり、ケンペルのいうようにここから輸出していたという事実である。だいたい日本には、お歯黒・かねの成分として五倍子が使われ男女を問わず平安期末期から江戸初期まで用いられ、江戸期からは女子のみに限られた（染歯の習慣は、東南アジアではインドネシアなどに残っている—平凡社大百科辞典“かね”の項）。この人達の歯堅めと、お歯黒独特の口臭を除くために室町・戦国期から、前述の小田原の郷土史家、片岡永左衛門氏が指摘するように方形、板形等のういろうが大いに使われ、これが外郎餅の原形になったと思われる。すなわち薬の丸薬の外郎・透頂香と、芳香性咀嚼剤の花外郎・透頂香の両方があったと思われる。その証拠に17世紀末遠藤元理は「百薬煎、即ち和製阿仙薬。一種泉州境にて製する者あり。是は透頂香に合する許りなり、薬に用うべからず」とし主剤を薬用と（恐らく）咀嚼剤とを区別して考えているようである<sup>118)</sup>。

又、古くは天正4年（1576）宇野吉治宛ての二荒山神社の別当からの切紙があり、次のような文言がある<sup>112)</sup>。

## 昌忠證文

當山日光町中外郎之丸薬，其方一人之外商売不可有之候，若其方之外ニ，外郎之丸薬等商売致之仁候者，宿以下迄断而可申付候，為後日以一筆相定候，仍如件，

天正四年拾月十三日

宇野藤右衛門尉殿

昌忠（花押）

このように外郎の丸薬と念をおしており，四方形や板形の花外郎は別ですよと言っているのだと思う。

頂（いただき）の出口は咽喉であり，喉から薫風が出るから透頂香である。阿仙薬，その和製の物はこうして使われた。当然底辺にはベテル・チューイングの習慣性があった。透頂香（丸薬），又は花外郎は，江戸後期にはマニユファクチャー（工場制手工業）の段階に入ったとして良い。著者の計算によれば享保15年（1730）にオランダ船によって輸入された阿仙薬は7.6トンにも及ぶ<sup>1)</sup>。阿仙薬製剤への使用（ウンカリア ガンビール），東南アジアへの嗜好性咀嚼剤への精製・加工，その再輸出，精製薬品の西欧への輸出，染色剤への応用がそのような結果として現われた。江戸期には薬用の他に赤茶色の染色に，灰汁を媒染剤としてアカシア カテキューが多用され，使用量が増えた点も挙げてよい。

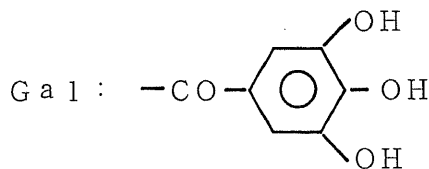
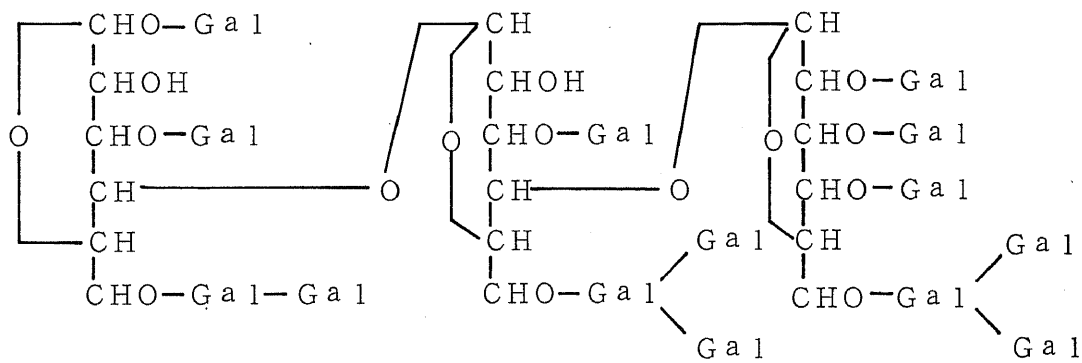
## 2. 補論・お歯黒と五倍子（和製阿仙薬）

お歯黒とは，読んで字の如しで歯を黒く染めること，鉄片を茶の汁または酢の中に浸して酸化させた褐色・悪臭の液（かね）に，五倍子（ふし）の粉をつけて歯に付ける。五倍子タンニンが鉄とキレートを作りそれが歯に固着すると思われる。古く上流婦人の間に起こり，白河院頃（1096）から公家，武士など男子も行い，後に民間にも流行して，老若男女，武士，僧侶，百姓，町人までが染歯をした。江戸時代には結婚した婦人は全てお歯黒をした。中世関東の侍

もこぞってこれをしたという。

三浦浄心の [北条五代記]<sup>119)</sup>によると「賢臣二君に仕えず。黒色へんぜざるもて鉄漿 (かね) とすといひて、侍たる人は、老若共に歯黒をし給ひぬ。山海経に云東海黒齒国あり。その俗、婦人、齒ことごとく黒くそむ。今案ずるに、日本東海中国衆これを訓<sup>おしう</sup>」と云々。「昔関東敵味方合戦し、首じっけんの時、はぐろの首をば、侍の首とて、先上へ懸たり。故に戦場へ出るには、討死を心がけ、楊枝を使ひ、歯黒をもっぱらとせり。いにしえの実盛は、びん・髭を黒にそめ、小田原北条家の侍は、はぐろをす。」とある。博物学者の南方熊楠は、お歯黒の習慣はベテル・チューイング (歯が赤黒くなる) から来ていると述べている [南方随筆]<sup>132)</sup>。

明治中期チェンバレン<sup>120)</sup>は、婦人のこの習慣を止めさせたのは昭憲皇太后 (明治天皇の妻) であると述べている。従って中世から江戸時代迄日本人、殊に婦人は、渋みと甘酸っぱい五倍子の入った和製阿仙薬すなわち百薬煎を好ん



五倍子タンニンの成分 (White etc.)

で使用したと思える。タンニンを添加することでかねののりを良くし、口臭を除く効果を期待したものと思われる。すなわち、五倍子タンニンの抗菌作用、収斂性により歯固めのため、あるいは病気の予防を目的に用いられたものと思われる。

百薬煎の作り方は、日本では<sup>97)</sup>「五倍子（フシ）十斤末トシ烏梅壹斤搗爛シ緑礬白礬各一斤赤蓼三斤老酒麴四両先ツ水十二斤ヲ以テ蓼ヲ煎メ濃湯トシ漉シ蓼ヲ去り次ニ烏梅五倍子緑礬白礬ヲ入レテ和シ磁瓶ニ入レ冷ルヲ待テ酒麴ヲ入レテ拌セ置ク風ノ入ラヌ処ニ置クヘシ黴ヲ生スルヲ待チテ取出シ晒シ乾ス即百薬煎ナリ。」

中国では<sup>121)</sup>「取五倍子研細末。每一斤用真茶葉一両。煎濃汁。入醪糟四両。搗爛拌和。器盛置糠缶中闇之。待発麴状。即成。捏作餅丸。晒乾用。」である。

和製百薬煎、中国製百薬煎は文献的には中世末期・近世初期に出るが、現物は15世紀頃には存在し品質も上練り、中練り、悪練りとあった。

### 3. 江戸期売薬の繁盛ぶり

江戸時代には売薬が盛行した。幕末の売薬処方約3万方といわれる。庶民にとっては医師の薬代は相当の負担となり、主にセルフメディケーションに頼っていたのが実情であろう。文政10年（1827）日光街道の各宿場町の売薬の状況は次のようなものだった<sup>103)</sup>。

「千住宿では、痰一切に効く家伝の保命丹その他諸薬調合所として小塚原町の信濃屋五郎兵衛、腹の薬金命丹と銘打って千住三丁目さかい屋五郎兵衛、わうたん（黄疸）の薬本家調合所として千住かもん宿の佐々木東水、草加宿では、一子相伝粒光丹として銘打った草加二丁目大塚屋庄蔵、越ヶ谷宿では耳の薬を扱う中屋五郎右衛門、杉戸宿では家伝秘方乳のである薬、小島屋文右衛門、小児五疳の薬として中町の虎屋善蔵、幸手宿では精製奇応丸として上野屋喜藤治、中田宿では、まめの薬に万能薬王散として中田道栄、古河宿ではてんかんの妙



薬取扱店伊勢屋市郎兵衛，間々田宿では眼病治療所として紀州屋吉兵衛，婦人治療薬人参安神散などを扱う大屋清兵衛，小山宿では一子相伝防瘡丸として常盤屋喜兵衛，宇都宮では，中風の妙薬，淋病の妙薬を扱う近江屋清兵衛，眼病治療所の田野辺意休，毒消しの妙薬毒消薬等を扱う薬種店伊藤良助，奇応丸の発売元として五十嵐与左衛門，明人伝来虎翼丸や日本安産丸などの製薬本家上野久左衛門，万病救命丸の豊田彦平，万治三年から血の道の薬を広めたという吉田市左衛門，唐人秘伝小児の薬一角奇応丸として日野屋治平，家伝の赤万能膏薬こく屋久左衛門」の名が記されている。これが日本全国の宿場町で売られていたのだから，大変な数になる。

更に薬の行商がある。薬は主として単品で行商するが，多くの薬を持ち歩く配置売薬もある。前の例が外郎売りや虎屋の解毒丸などで，後者の例が越中富山の配置売薬などである。富山の薬行商人は，天保年間（1830頃）1,700人位で1年で5万両，文久年間（1860頃）2,200人で一年間で20万両<sup>139)</sup> 売り上げたという。

嘉永2年（1846）版「二千年袖鑑」<sup>106)</sup>によれば大阪で財産銀1万貫（17万両弱—現在の金で100億円以上）の薬屋に，大阪対州屋敷前干牛丸（牛肉，茯苓，蓮肉，山薬，茴香などが入った強精剤），堀の肝涼圓（広東人参，甘草，沈香，熊胆，丁字などの小児強壯剤），浮田・鎮火五龍圓<sup>125)</sup>（のぼせ症，各種瘡—マラリア），吉野・人参三臟圓（人参，生地黄，山薬，牡丹皮，茯苓，を入れた強壯剤）などの名が挙げられている。これに京都，江戸の薬屋を加えれば，長者の数は十指に余ると思われる。滋養，強精，小児強壯剤の他に，明治頃迄日本の農，山，魚村で流行した瘡（マラリア）の売薬がこれ程売れたことは意外であった。

#### 4. 外郎の宣伝

元禄以後ういろの販売に成功した外郎は，宣伝の分野でも着々と手を打っ

てその成果を全国的なものにしていった。例えば歌舞伎、絵草紙の類、浮世絵、道中絵図などにいろいろ、その店屋、その販売員の宣伝を行った。以下に示すのはその一例である。

図1（67頁参照）は宝暦5年（1755）頃江戸の版元鱗形屋孫兵衛から出された外郎の絵草紙からとったもので、鳥井清經の作品である。文中に一りう一せん（一粒一銭）とある。一銭は一文である。

図2（67頁参照）は〔<sup>えほんかがおとぎ</sup>絵本家賀御伽〕からとったもので寛延五年正月（1750）長谷川光信作である。

図3（68頁参照）は有名な秋里籬島〔東海道名所図絵〕の小田原図で寛政9年（1797）のものである。

図4（68頁参照）は〔<sup>せつつめいしよづえ</sup>撰津名所図絵〕からのもので寛政8年（1796）発行、著者は前図と同じである。

図5（69頁参照）は図4の一部を拡大したものである。これが実際の外郎売薬人である。

図6（69頁参照）は草双子（会席料理世界吉原）文政8年（1825）のもので、これは歌舞伎からの図である。

図7（70頁参照）は幕末で、<sup>うたがわくにつな</sup>歌川国綱の作である。虎の置き物が良く判る。前の行列は、將軍上洛を描いている。図3には虎の<sup>ふすまえ</sup>襖絵が出ている。江戸期に虎屋外郎といった頃のことである。

図8（70頁参照）は共に「外郎家伝」に載っている関東大震災前の写真であり有名な八棟造<sup>注5)</sup>である。



図1 ういろうの絵草紙より鳥井清經作

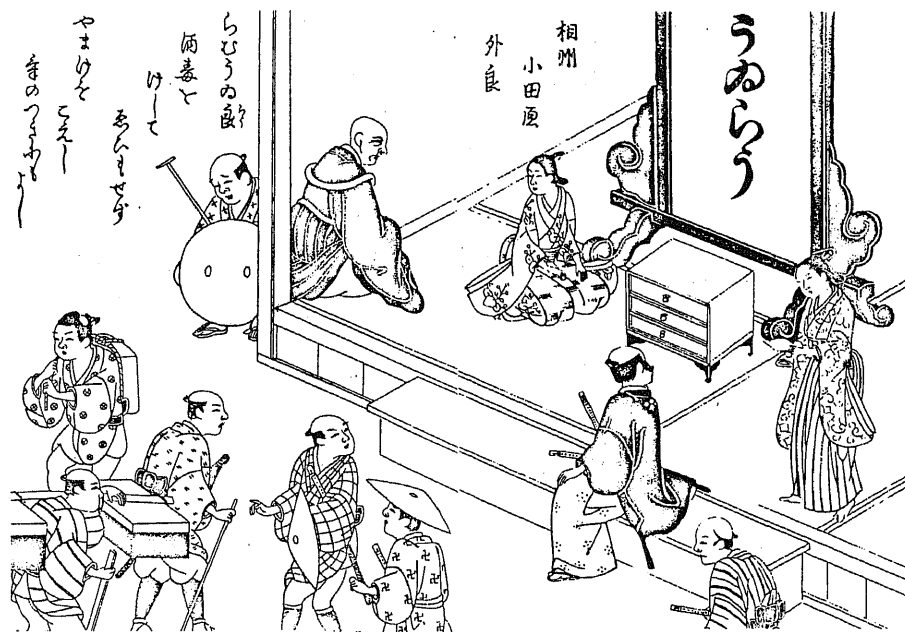


図2 [絵本家賀御伽]より長谷川光信作

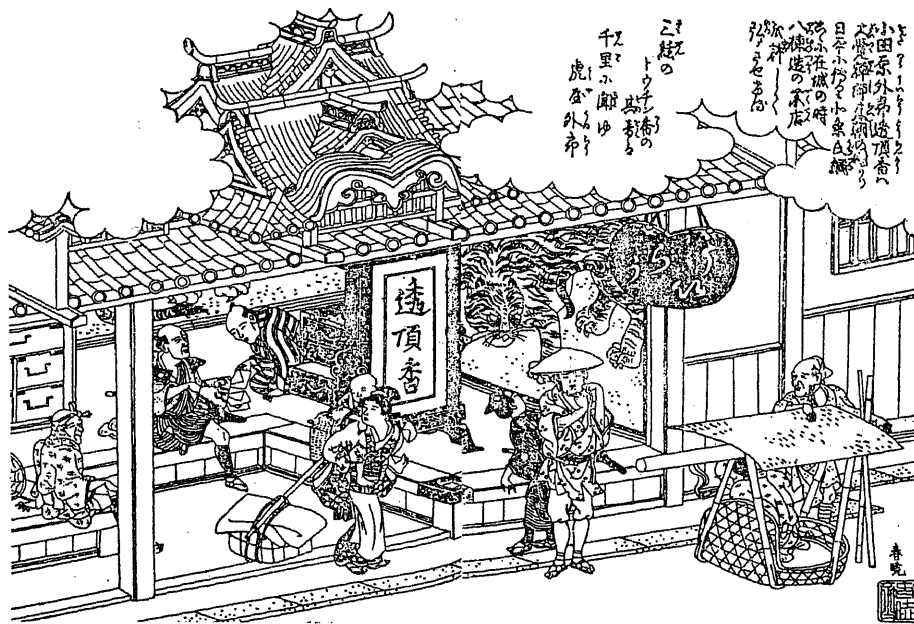


図3 [東海道名所図絵]より小田原

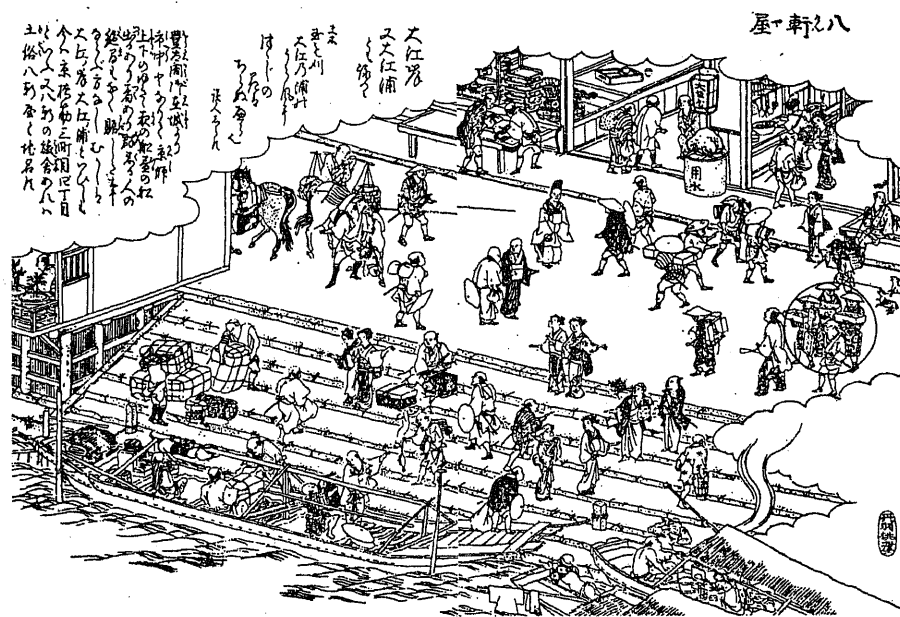


図4 [摂津名所図絵]より(○印部分は5図参照)



図5 〔江戸物売図聚〕より三谷一馬作  
(4図の○印部分拡大図)

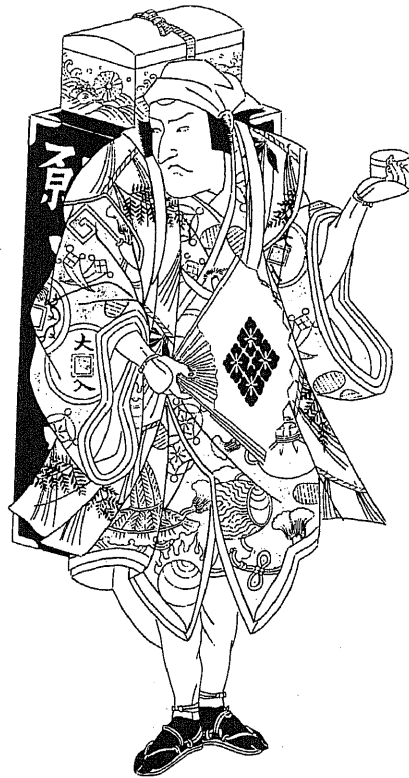


図6 草双子〔会席料理世界吉原〕より歌川国安作



図7 東海道小田原(幕末)歌川国綱作



図8 [ういろ家伝]より八棟造

「ういろ<sup>せりふ</sup>う台詞」

拙者、親方と申すは御立会いの内に、先だっ<sup>て</sup>ご存じのお方々もござりましょ<sup>う</sup>が、江戸を立て二十里上方、相州小田原一色をおすぎなされて、青物町を左においでなさるれば、欄干橋虎屋藤右衛門、只今は剃髪いたし、円齋と名乗ります。元朝より大つごもりまで、御手に入れまするこの薬は、昔、陳の国の唐人外郎と申す者、わが朝へ来たり、帝へ来たり、帝に参内のおりから、この薬を深く秘めおき、用ゆるときには、一粒ずつ冠の隙間より取り出す。よってその名を帝より透頂香と賜る。すなわち、文字には、「いただき、すく、にほひ」と書いてとうちんこうと申す。只今、この薬、ことのほか世上に広まり、方々に偽看板を出し、いや小田原の、灰俵の、さんだわらの、炭俵のといろいろ申せども、平仮名をもって、ういろ<sup>う</sup>とするせしは、親方の円齋ばかり、もしや、御立会いの内、熱海や塔ノ沢へ湯治においでなさるるか、または、伊勢へ御参宮の折からは、必ず、門違いなされますな。お上がりなれば右がわ、お下がりなれば左の方、八方が八つ棟、表が三つ棟玉堂造り、破風には菊に桐のとうの御紋を御しゃめんあって、系図正しき薬でござる。いや、最前より家名の自賛ばかり申しても、ご存じない方には、正味の胡椒の丸呑み、白河夜船、さらば一粒食べかけて、そのきみあいをお目にかけてましよう。先ずこの薬をかよふに一粒舌の上に乗せまして、腹内へ収めますると、いやどふもいへぬは。胃・心・肺・肝がすこやかになって、薫風のんどより来たり、口中びりょうをしょうずるがごとし。魚、鳥、きのこ、めん類の食い合わせ、その外、万病速効あること神の如し。

さてこの薬第一の奇妙には、舌の廻ることが、錢ごまがはだして逃げる、ひょつと舌が廻りだすと、やもたてもたまらぬじゃ。そりゃそりゃまわってきたは、まわってくるは、アワヤ咽、サタラナ舌に、か牙サ歯音、ハマの二ツは唇の軽重、かいごう爽やかに、あかさたな、はまやらわ、おこそとの、ほもよろを、一ツにぎへぎに、へぎほし、はじかみ、盆まめ・盆ごめ・ぼんごぼう。

摘蓼， つみ豆， つみ山椒。書写山の社僧正。

粉ごめのなま嚙， 小米のなまがみこん粉米のこなみがみ。糸需子・ひじゅす・  
糸需子・しゅちん。

親も嘉兵衛， 子も嘉兵衛。

親かへい， 子かへい。子嘉兵衛親かへい。

ふる栗の気のふる切り口。

雨がっぱか， 番合羽か。

貴様のきゃはんも皮脚絆。

我らのきゃはんも皮脚絆。

しっかは袴のしっころびを。

三針はりなかにちよと縫うて。ぬふてちよとぶんだせ。

かわら撫子・野石竹。

のら如来， のら如来。三のら如来にむのら如来。

一寸のお小仏に。おけっまずやるな。

細溝にどどちよ， によ， ろ， り， 京の生鱈， 奈良生鯉， ちょっと四五貫目。

お茶だちよ。茶だちよ。

青竹茶筌で， お茶ちゃとたちや。

くるはくるは何がくる。

高野の， のおこけら小僧。

狸百匹， 箸百せん， 天目百ばい， 棒八百本。

武具・馬具・ぶぐ， ばぐ・三ぶぐばぐ。合わせて武具・馬具・六ぶぐばぐ。

菊・栗・きく・くり三きく栗， 合わせてむぎ・ごみ・三むぎごみ。合わせて  
むぎ・ごみ・六むぎごみ。

あのなげしの長刀は誰長刀ぞ。

、向こうのごまがらは， 荏の胡麻がらか・真ごまがらか。あれこそほんの真胡  
麻がら。



がらがらぴいぴい風車，おきやがれこぼし，おきやがらこぼし，ゆんべもこぼしても又こぼした。

たあぶぼ，たあぶばば，ちりから，ちりから，つつたっぼ，たっぼたっぼ一丁だこ。落ちたら煮て食う。にてもやいてもくわれぬものは，五徳・鉄きう・かな熊。どうじに・石熊・石持虎熊虎す，中にも東寺の羅生門には，茨木童子がうで栗五合つかんで，おむしゃるかの頼光の膝元去らず，鮎・きん柑，椎茸定めてごたんな，そば切り，そうめん，うどんか，ぐどんな。小新発知（こしぼち）。

こ棚の，こ下の，小桶にこみそが，こ有ぞ。こ杓子，こもって，こすくってこよこせ，おっと合点じゃ，心得たんぼの，川崎，かな川，保土ヶ谷，戸塚は，走ってゆけば，やいとを擦りむく三里ばかり藤沢，平塚，大磯がしゃ小磯の宿を，七つ起こして早天そうそう，相州小田原，とうちん香，隠れござらぬ貴賤群衆の花のお江戸の花ういろう，あれあの花を見て，お心を，お柔らぎやという産子（うぶこ）・這子（はうこ）にいたるまで，此のういろうの御評判，ご存じないとは申さまい申され，まいまいつぶり，角出せ，棒だせ，ぼうぼうまゆに，うす，杓，すり鉢，すりばち，ばちばちぐわらぐわらと，はめをはずして，今日おいでのいづれ様に，上げねばならぬ，売らねばならぬと，息せい引ぱり，東方世界の薬の元締め，薬師如来も照覧あれと，ホホ敬って，ういろうはいらっしゃりませぬか。

## 5. 経済面から見た外郎（一つのシミュレーション）

小田原外郎は，中世から有名な修善寺紙を薬包紙として使っていた。色好紙といい〔大日本地名辞書〕には「その<sup>しゃかつ</sup>赭褐なるを色好紙と言ひ<sup>たて</sup>蓼木の皮を煎じ色料となす，故に虫食まず」とある。修善寺紙は一帖50枚，一枚は縦32cm，横42cmで，15.7cm角の薬包紙4枚と11cm角の薬包紙3枚がとれる。大の紙は透頂香200粒が入り，小の包には50粒のそれが入る〔色吉紙通帖〕<sup>90</sup>。合わせて1,000

粒（現在市販の透頂香の粒で計測した）の薬包紙が採れる。

天保4年（1833）外郎は4月から6月の3ヶ月に約200帖の色好紙を消費している。このことは1,000万粒の透頂香が売れていることを意味する。3月は富士山の山開きで、7月は御殿場の御廚不動尊みくりやふどうそんの札所巡りふだしよめぐで、12月は伊勢参りでそれぞれ100帖の消費があった。年間900帖の消費である。これは4,500万粒の外郎が売れたことになる。紙代だけでは年間10両となる。

又これを[刪補家伝預薬集]<sup>67)</sup>（1778）の処方で、下記の薬の原価で計算すると約700両弱となる。この処方では阿仙薬、竜腦、麝香、丁子、甘草、白檀、石膏、蓬砂などが主成分となっていて現在の清涼剤の処方と変わらない。下記の参考資料は、文禄2年（1593）常陸の国の国主佐竹義宣の家臣大和田重清が長崎で求めた薬価である。江戸期の唐薬は、銀だてで上下はあるが大差はない。1両は、銀60匁、4,000文で計算した。他の薬は現在の値段から類推した。薬、数量、値段（銀）は、あせんやく3斤余、3.8匁。麝香0.5斤、110匁。竜腦9匁、45.2匁。沈香336匁、329匁等 [水戸市史]<sup>87)</sup> である。

店の人数を100人として人件費720両、この内行商にあたる人数を一組5人として約25人、徳川時代の五街道すなわち東海道、中山道、奥州街道、甲州街道、日光街道に一組5人で往復廻らせ、又全部の宿場248次に泊ませたとして（文化・文政、1804～'30頃一泊200文）費用125両、雑費込みで150両、山陽道、四国、九州を廻って150両、合わせて300両となる。この行商人は何かの催し物があると揃って出かける。寛永7年（1630）当麻の市祭り（今の相模原市）に際してはういろう若衆21人が出ている [相州東郡当麻市祭り之覚]<sup>89)</sup>。尚売上げの三分の一を行商人に任せて五割の儲けを与えたとして総出費年間3,455両。これを、透頂香一粒一錢（文）として年間総売上げが1万1,250両（1755年頃鳥井清經作外郎の絵草紙に一粒一錢と出ている）、更に藩への運上金が売上げの三分の一として、残り約4,000両、実に大変な儲けである。八棟造<sup>注5)</sup>の屋敷など幾つでもできる。このことは、透頂香の総売上げは原料薬価の約16倍で、

営業利益は総売上げの70%弱になる。この頃の一文は現在の価格で20円位に相当することから総売上げの宝暦頃（1750～）の時価は9億円になり営業利益は6億2千万円に達する。これに輸入阿仙薬の加工，花外郎の売上げを加えればもっと利益が上ったものと推測される。

当時の売薬業に関連する数項目の資料を挙げると、同じ神奈川県の大雄山最乗寺の先々代中村藤蔵氏から、明治の初めの頃の話として、その寺の薬・大雄丸などを売る際、寺の祭礼などがある時は売上金を馬の背につんで運んだものだと言っている。

京都伏見の売薬屋保命丸本舗，世に「おけや薬」で主人板倉塊堂重陳が幕末文久3年（1863）11月から翌元治元年5月にいたる半年で、長州の志士に2,000両を出したというが、流行している売薬屋であれば容易なことである。保命丸は取次販売店を全国に500余持ち、製造に従事するもの数百人といわれ京都屈指の豪商であり、この程度の売薬業は全国に多くあった〔日本歴史〕<sup>99)</sup>。

尚小田原外郎が、和製阿仙薬を輸出しかつ使用しており、又竜腦の代わりに片腦（精製樟腦）を用いていたとすれば、その儲けはもっと大きいものになる。片腦はその役割でよく用いられた。その際には透頂香の総売上げは、原料薬価の50倍にも達したと思われる。現在の金額の換算は、米一石9万円として行った。

## 6. まとめ

江戸期売薬屋としての小田原外郎は、丸薬の透頂香の他、多くの薬剤を持ち、お歯黒婦人のための芳香性咀嚼剤の花外郎・透頂香も売っていたことを明確にした。江戸中期の阿仙薬の輸入、精製、加工、中国も含め東南アジアへの再輸出、和製偽薬製造の製造、販売は大量でマニファクチャー（工場制手工業）の段階に達していたことも考証した。その中心地は京都、小田原であった。また江戸期の売薬について調べ、ういろいろは庶民の要求にあい大変繁盛した様子

を明らかにし、その背景に歌舞伎、絵草子も使い宣伝方法のたくみさを明示した。陶器製の外郎売りの玩具も発売された。

経済面からも一つのシミュレーションを行った。丸薬の透頂香だけでも小田原外郎の利益は莫大なものだったらしい。その背景として、日本各地への行商による販売が盛んだったこと、小田原外郎が、かつて有名であった京都外郎の直系であるという〔家譜〕を作り、大いに利用したこと、及び、宣伝方法が非常にたくみであったことなどが挙げられる。また、透頂香は、パキスタン、東南アジア、中国南部にも広がるベテル・チューイングの習慣に基づき、南方系人種にも起源をもつ日本人<sup>134)</sup>の阿仙薬好みに食い入り、多勢のファンを得て成功したものであろうと結論した。

## 第5章 明治期からの外郎

明治10年1月22日、時の政府は「売薬規則」を公布し、「此規則に称する處の売薬とは丸薬、膏薬、練薬、水薬、散薬、煎薬等家方を以て合剂し、販売するものとする」とした。これは税金、毒・劇薬の使用禁止など広範にわたるものである。又同時に売薬営業税として「薬剂一方につき一箇年二円」を課することとした。明治14年における統計によるとこの規則により売薬営業税収入高は、一ヶ年62,174円に達した。約3万方の売薬があったということである。

明治政府は、江戸時代まで野放しで売買されていた薬に規制をかけたのである。それというのも家伝薬、秘薬といわれて、内容の不明な売薬を早く西欧なみの科学的な薬の水準に引き上げたかったからである。これらの措置は、当時の知識人からも支持された。例えば福沢諭吉は、自分の主催する「時事新報」で、明治15年11月18日に次のように売薬を批判している<sup>123)</sup>。

「売薬の流行は誠に驚くべきことである。この年の三月初旬まで免許された薬方の数は三万九百九十一種に上り、そのうち九百六十一種は一月から二月までの六十日間に願ひ済みになったものである。それらの薬方を聞くと、猫の子の黒焼、蛇の首の干物があり、なお、ひどいものには火葬場の油煙、便所の凝結もあり、鼻汁に等しい水薬に、耳の垢に等しい散薬など、気持ちの悪くなるものが多い。これより、少し薬らしい薬といえは葛粉などを基にして様々な雑物を手当り次第に引きませ、薄荷油、麝香を使い、舌の先と鼻に突き込んで塗り付ける趣向である。売薬が役に立つか立たないかは今更、いうまでもない。人の病はそれぞれ異なる。医者は診察するとき平生の身の有り様を聞いて、当日の容体の変化を尋ね、容貌顔色、言語、呼吸の状態などをこと細かに聞き出し、これならばと思う薬を与えても、まだ不安があるものである。医者 of 心配は病の診察と調剤にある。それに比べ売薬とは、一体何であるか。万病すなわち、霍乱（日射病）、中風、血目、爛目、血の道、痘瘡、頭痛、仙氣などに内

服しても外用しても良いとは何とも疑わしい。乞食のお椀であれば錢を入れたり、米、茶を入れて食事に使ったり、<sup>ちよぼ</sup>樽蒲（博奕）あるいは枕の代わりになり、一つでも何もかも間に合わせることができる。万用一椀ということになるが、売薬の万病一薬は受け取りがたい。古着を買っても身丈に合わないこともあり、一剤の薬で万病に合うはずはない。売薬は役に立たないのに流行するのは驚くべきことである。薬方の数三万九百九十一種にして、受売鑑札の数は明治十年十二月まで八万二千五百九十四枚となっており、この三万九百余の製薬は八万二千余の受売人が毎年どれほどの利益を得ているのであろうか。非常に安く見積もっても、薬方一種の利益を平均百円として三百万円にもなる。この三百万円は日本人が毎年、猫の黒焼や鼻汁に似た薬に払う金額である。まことに愚かなことである。売薬は<sup>まじない</sup>巫咀と同様に愚民の気休めである。政府がこれを許しておくのも、毒にも薬にもならないと認めているからで、世間のバカさ加減を見物しているのである。結局は国民の知恵が付くまでは何とも仕方がないとしている。政府が個人のところまで入っていくことはできず、また、売薬業者も商売としている以上、それを奪うことはできない。三万九百の薬方はひとつとして役に立たず、無益無用であることが明白であることがわかっているのに、世のため人のためと言って売ることは控えるべきだ。無用である薬であれば政府が売薬を一切禁止してはどうかの議論はある。しかし、寒村僻地の医者のないところでは、売薬を当てにして病人を介抱する人もいる。その前に効果はなくても、それで安心すれば、それが売薬の効能とはいえる。世の中は少しずつ道理に近づき、愚かな挙動は次第に減少してきている。すでに政府は売薬に税金をかけて売薬流行の勢いを抑えようとしている。学者医者はこの政策が愚民を困らせるためのものでなく売薬に対する啓蒙であることが本意であるのを知っている。ひとつの村で売薬が無効であることを知り、医者に頼る人が一人でもあれば、その考えがもう一人に伝わって知識の進歩となり、日本人であれば、愚昧の域から脱することに勉め、一生涯で出来なければ二代、三代で達成させ

るよう日夜心配することは正しいことである。今、売薬を捨てて医師に診察を受けようとしても、医師の数は少ない。東京でも良医を見つけるのは難しく、まして寒村僻地では親の病気に隣村の医師を迎えるという。その医師がどんな学問を行ってきたかわからない。一部の医書のみを読み、それが〔傷寒論〕で、使う薬が草根木皮であれば家伝の秘薬と同じで、これはまた売薬師に等しい。売薬を用うるのであれば、何も医師によらなくても売薬の店から買うことができる。売薬の中には稀に少し効能のあるものがある。下剤、下痢止め、健胃、鎮痛剤などは中ぐらいの効果があり、僻遠の藪医者の治療と伯仲することもある。これは世間の藪医者にとっては恐るべきことで、これらの医者は売薬師と同じと見られても致しかたない。医者の名があれば日頃から多少の患者に接して自ら臨床に望むことが必要である。臨床は医術のなかで最も大切なことで、その証拠には年来の漢方医と西洋医の治療をめぐる争いで、漢方医の治療は病に適することはあるが学問の巧拙がない。日本の医学の今後を考えたとき、医師の投薬する薬も売薬店の薬も同一のものとすることは望ましくない。今こそ売薬の流行を鎮め、医学の進歩を奨励すべきである。売薬の流行がどれほど強まっても、この薬で満たされぬことはいうまでもない。十中まれに一、二の病気に適していたとしても、八、九の損失を償うことはできない。百のうち百、効かないものが多い現状では効果を期待して量を増やすことも考えられる。天下に一名の良医が養成されれば一分の実益を得る。良医を養成する方法としては、田舎の医者に真の医道に入ることを勧め、その人が出来なければ子息が入ることも考えられる。医学が進めば実益が増えるが、売薬が進めばそれによる損失の方が大きい。そのためにも、売薬を捨てて医学を興すことの方が大切である。」

もっとも理論であり、この論説は売薬業者からの裁判沙汰に発展し、3年後に福沢諭吉が大審院で勝訴した。しかし低所得層の需要もあり、西洋医師の少ない現実も作用して売薬自体は繁栄を続けた。

江戸時代迄は薬業家は一般に他人の売薬を請け売りせず、実母散、妙振り出し、奇応丸など公知の売薬は自製して販売し、何れの薬店でも50方から100方以上製剤していたので、毎年一方につき二円ずつの売薬税は誠に重税だった。これが対策として各薬店は、売薬を一時廃業し、製造を分担して小数の代表者を定めて免許を取り、他は請け売りの形式で税をまぬかれる方法を講じた。その結果として（1）他人の売薬を「請け売り」する習慣を生じ、（2）製造発売する小数の専門業すなわち「売薬本舗」なるものが発生し、（3）同時に本舗から小売り店に取り次ぎ仲介をする「売薬問屋」なる新営業が現れて、かえって売薬は盛んになるという皮肉な結果となった。

外郎もそれに習い明治後年次のような店の名前にした。

**外郎薬房 薬種・売薬卸問屋、家伝透頂香本舗<sup>107)</sup>。**

明治期の外郎についてこれ以上概観する資料はないが、明治期の政府の要求、知識人の批判にも耐え、又、第二次大戦の中で多くの売薬（家庭薬）が政府の方針で不要不急の薬として消えていったが、透頂香は存置処方として残った事実は注目に値する。やはり伝統の重さと口中清涼・整腸剤としての効果を評価されたものと思われる。その時の処方は、阿仙薬（主薬）、竜腦、丁子、蓬砂、人參、石膏、縮砂、甘草、桂皮、薄荷腦、麝香、藁撥を配合したものであった。

小田原外郎は、現在も透頂香を販売しているがこれが隠れたブームになっている。日本人は味覚、嗅覚に敏感であるが透頂香の主薬である阿仙薬の独特の味と香りがハーブ的な清涼効果をもたらして、心理的にも気力充実に繋がり疲労回復、体力増強に良いという評判がたち購買者が殺到し、販売制限を行っている。殊に老年者にファンが多いという。明治期の批判を乗り越え現在迄続くそれなりの理由があるのであろう。当然伝統的な秘薬としての憧れも好印象となって重用されているものと思われる。



## 第6章 外郎餅

外郎餅の初見は、寛文十年（1670）長崎出身の角屋七郎兵衛という人物が三十年ぶりに安南から戻り、歓待をうけた時の献立表に「ういろもち」がみえる<sup>108)</sup>。従って小田原外郎が全国を廻りはじめた頃と一致する。外郎は中・近世には、花外郎・透頂香という方形または板状の形の菓剤を出し、これは婦人が常用して歯を締め、口臭を除くために用いた。その色は黒く香りがよいので、最初黒砂糖を使ってできた黒色の餅に外郎の名を冠したのであろう。

[和漢三才図會]<sup>124)</sup>によると次のようなものである。

「按、外郎餅羊羹属、外郎相州小田原人名、製透頂香丸賣名、竟呼為菓名黒色香美、此餅色以稍似名、造法粳八合糯一合半 葛半合共一升細末、別黒砂糖一斤半 以水七合畧煎、去渣取精汁以煉之如膏、而蒸之、候湯氣起於甑盛練膏蒸之、則成、以糸切之」大要としては外郎餅は羊かんの一種で、外郎透頂香の黒色香美の点で、外郎に以ているところから、その名が出たということである。

大体外郎餅は粳米、糯米、葛、蕨などを用い蒸したもので一般に棹物、すはまなどといわれる。文献には、天和二年（1682）8月に来日した朝鮮信使饗応の献立に外郎餅と出てくる。又 [雍州府志]<sup>5)</sup>（1684）にも外郎餅と出てくる。江戸期には大変もてはやされた菓子である。<sup>りょうりものがたり</sup>[料理物語]<sup>105)</sup>（1643）にはないが [合類日用料理抄]<sup>104)</sup>（1689）にはその作り方が出ている。このころは白砂糖が出て色の白い外郎餅が出ているが、外郎が売菓で廻り歩いた土地には黒くて、この菓に似ている菓子が沢山売り出された。

浮世草子などで見ると元禄頃歌舞伎の棧敷で、ういろちを食い散らかしていたものらしい。小田原で「ういろち飴」、山口、糸崎、長崎、備後、小郡、広島には「外郎」という名称で、福岡には「ういろち棒」という名前で、豊前中津では「ういろち饅頭」、宮崎では「ういろち餅」である。さらに徳島では、江戸中期から入り節句に「ういろ」を作る習慣があり、名古屋でも、「黒外郎」

はじめ良く知られている。京でも「五建ういろ」、近江八幡でも「ういろ」などが残っている。

この地方を小田原外郎が良く販売に歩いたという証拠であろうか。

一方東北地方に外郎餅の伝聞がないのは、この地方には外郎餅の主要成分である澱粉（粳米を良く水洗いして乾燥させ粉にした物）が普及していないためと思われる。澱粉は、元来西方の由来で外郎餅の発生は、関西方面であることを思わせる。

## 総 括

著者は、1955年より小田原の売薬「<sup>ういろう</sup>外郎・<sup>とうちんこう</sup>透頂香」をテーマとして文献調査を行い、当時の薬業関係誌（1956）に発表した。その調査を進めるうちに、各種外郎の文献の記載に相違・矛盾を発見し、一次資料調査の必要を知り、以後40年に亘り資料収集につとめた。これらの資料を詳細に調べ、以下に示す事項を証明あるいは推論した。

（1）従来、日本外郎家の祖人として陳順祖と陳延祐の2名の名前が挙げられ混乱がみられていたが、この両者を兄弟である旨整理、立論した。

（2）外郎家の子孫にまつわる事項の各件について起源資料を探索し、正すべきを正した。殊に京都外郎家の末期の当主、外郎右近が流刑になった点を明らかにした。

（3）小田原外郎家が京都外郎家の直系であるとの説を否定し、新たに江戸末期西洋流兵法家として有名な、伊豆韮山の江川担庵の家系に連なることを立論した。

（4）外郎の医家としての日本への貢献は、一つに金・元医学の四大家の理論を日本に持ち込んだと思われること、二つ目は東南アジアに敷衍する阿仙薬などの嗜好性の強い薬物、ベテル・チューイングの習慣に合致した薬物を早期に導入し、精神的にも有効な清涼感溢れる清涼・整腸剤を日本にもたらしたことが挙げられる。

（5）薬業家としての外郎については、非常に緩和な作用を持つ多くの薬剤を、庶民に提供できるようにしたこと、透頂香のような口中清涼剤を広めて万民がセルフメディケーションにより、より快適な生活を送れるようにしたことなどが挙げられる。

（6）日本人のお歯黒は、五倍子と鉄剤を使った歯の装飾で平安期から幕末まで続いた。お歯黒の歯固めと口臭の除去に、花外郎・透頂香という百薬煎

(和製阿仙薬)を使った板状の口中芳香性咀嚼剤が使われたことを明らかにした。これが17世紀中頃から現れた「外郎餅」という菓子の原型になったことも同時に検証した。これが百薬煎という五倍子を主剤に使った物であることをつきとめた。尚重要成分の竜腦の代わりに精製樟腦の片腦も使われたことも考証した。

(7) 京都外郎の衰退した後、その被官(家来)であった小田原外郎がそのあとを受け継いだ。彼らは透頂香を非常に文化的に洗練された宣伝手法で、広めることに成功したことを明らかにした。すなわち絵草子や歌舞伎の台詞にこの薬を取り上げて多くの人に、その効果を知らしめた。その成功の陰には南方系人種にそのルーツ<sup>134)</sup>を持つ日本人のベテル・チューイングへの嗜好性があることも結びつけ、新しい見解を示した。

## 注及び参考文献

- 注1) 外郎は、中国語（北京官話）でいうとワイランで、外は唐音でウイという。
- 注2) 木版図系の寛永18年（1641）以前の洛中絵図に〔外良ノ町〕とある。
- 注3) 能楽〔唐船〕は、能楽曲名、唐船の乗組員慶官人は、日本拘留中2人の子供をもうけたが唐からは2人の子が迎えにくる。日本の子供は同行を許されないで心中しようとするが、領主が哀れんで同行を許したので親子5人で喜んで出船する。
- 注4) 御薬院と大医院は、北京中医学院主編（夏三郎訳）：〔中国医学史講義〕，燎原刊P.123に出てくる元代の医制である。
- 注5) 八棟造とは、権現造りのことで神社の形式を取り入れた華美な建築物で、外郎の他伊勢の射和と松坂、奥州の仙台札の辻にあったというが全て現存していない。
- 1) 清水藤太郎：日本薬学史，南山堂，東京，pp.178-183（1949）；宗田 一：日本の名薬，八坂書房，東京，pp.30-34（1981）
  - 2) 杉山 茂：陳外郎とその周辺，薬局の領域，(5a)，33（1956）
  - 3) 寿桂月舟：幻雲文集，京建仁寺の僧寿桂月舟の文明・永正頃の漢詩を集めた作品，続群書類従第13輯巻342，p.368
  - 4) 貝原益軒（1630～1714）：筑前国続風土記，巻の29，土産考上，国書刊行会，東京，p.662（1973）
  - 5) 黒川道祐：雍州府志，巻6，土産門上（薬品部），p.161（1686）
  - 6) 林 羅山他：本朝通鑑，p.641（1679）
  - 7) 小葉田 淳：中世日支通行貿易史，刃江書院，東京，p.240
  - 8) 辻 善之助：日本仏教史，第6節，岩波書店，東京，p.55（1965）
  - 9) 豊田 武：日本商人史（中世），東京堂，東京，p.190（1949）
  - 10) 外郎家譜：元禄11年（1698）箱根早雲寺の沙門宗貞が，小田原外郎の依頼によって著作。
  - 11) 谷川士清（1709～'76）：倭訓栞，中編ういろう。
  - 12) 槇島昭武：史籍集覧・関八州古戦録，14巻，p.2（1725）
  - 13) 浅井了意：史籍集覧・鎌倉管領九代記，7巻，p.12（1673）

- 14) 江西逸志子：北条五代記，教育社，東京，p.172（1672）
- 15) 岡本為作：北条時頼記，浮世草子。（1691）
- 16) 遠藤数馬：駅路の鈴，1巻，p.25（1858）
- 17) 伊勢の貞丈：貞丈雑記，有職故実書。（1843）
- 18) 関 修齡：松窓慢録，江戸時代の漢学者，（1800）
- 19) 浅田宗伯：皇国名医伝，巻1，（1851）（国会図書館）
- 20) 吉田兼熙（1348～1408）：吉田日次記，（吉田社の神官）の日記。（国会図書館）
- 21) 山科教言（1328～1409）：教言卿記，藤原北家の出，大納言の日記。代々内蔵頭を世襲した。（国会図書館）
- 22) 日野兼宣（1381～1428）：兼宣卿記，日野家広橋流の公家，大納言の日記。（国会図書館）
- 23) 老松堂日本行録：応永27年（1420）朝鮮還礼使節・宗希環<sup>ソンギョホン</sup>の日記，岩波文庫。
- 24) 蔭涼軒日録：臨濟宗相国寺・鹿苑院内の蔭涼軒主代々の公用日記。（国会図書館）
- 25) 聖劑総録：北宗末年（1110）に〔大平聖恵方〕の基礎の上に，当時の民間の薬方を広範に収集し，これに〔内府〕所蔵の秘方を合わせ，整理を加えてなったものである。8年を費やし政和年間（1111～'17）に完成した。記載の処方はいくつに近いか。
- 26) 山科言国（1452～1503）：内蔵頭・権中納言の日記。（国会図書館）
- 27) 山科禮記：山科家儒者の古礼に基づく記録。（国会図書館）
- 28) 大館伊予守尚氏：長祿二年以来申次記，群書類従第22輯，巻406，p.195（国会図書館）
- 29) 伊勢貞春：殿中申次記，文明（1469～'87）期の幕府の礼式次第記，群書類従。（国会図書館）
- 30) 大館常興：年中定例記，群書類従。（国会図書館）
- 31) 蛭川親元（1433～'88）：親元の日記，室町中期の武将，足利義政の時政所になり幕政に参加した。日記は当時の政治を知る上で重要。群書類従。（国会図書館）
- 32) 薩藩旧記：島津家文書，宝鑑其一。（国会図書館）

- 33) 山崎美成：海録卷10, 日本随筆大成, 卷10, p.9 (1820)
- 34) 甘露寺親長：七一番職人尽歌合, 明応年間(1492)頃成立。(国会図書館)
- 35) 三条西実隆(1455~1537)：実隆公記, 内大臣, 文明より天文期までの日記。(国会図書館)
- 36) 近衛尚通：後法成寺尚通公の日記。(東大史料編纂所)
- 37) 鎖碎録：宋代(1127~)の医書, この頃中国では歯磨きの習慣があった。
- 38) 上杉文書：神餘昌綱書状, 上杉家文書pp.2-316(東大史料編纂所)
- 39) 大館常興日記：尚氏ともいう, 室町期の武将, 礼式・故実に詳しい。(国会図書館)
- 40) 松永拋徳：本朝世事談綺, 享保年間(1733頃)刊, 日本随筆大成, p.478
- 41) 徳川実紀：徳川家の公的歴史書, p.594(国会図書館)
- 42) 柳亭種彦(1783~1842)：足薪翁記, 日本随筆大成, 14巻, p.166
- 43) 水雲堂弧松子：京羽二重, 貞享2年(1685)(国会図書館)
- 44) 松江重頼(貞徳門下)：毛吹草, (岩波文庫, p.157). (1638)
- 45) 季弘大叔：室町中期, 東福寺の禅僧蔗軒の日記, 大日本古記録。(東大史料編纂所編)
- 46) 宣胤卿記：中御門権大納言宣胤卿の日記, 永正14年(1517)5月12日の項。
- 47) 陳有年員外郎遺像：幻雲文集, 続群書類従第13輯, 巻第342, p.368
- 48) 陳員外郎友蘭晤公肖像：幻雲文集, 同上p.373
- 49) 陳舜臣：中国の歴史, 平凡社, 10巻, p.120 (1982)
- 50) 義堂周信：空華日用工夫略集, 南北朝の頃の臨齊宗の学僧, 号は空華道人, (1371)2月30日の項
- 51) 小葉田 淳：唐人町について, 日本歴史(雑誌)第5号, p.8
- 52) 多聞院日記：奈良興福寺の搭頭多聞院の住職による日記, 主に英俊が書く, (1478~1615)
- 53) 大乘院寺社雑事記：奈良興福寺の大乘院の尋尊, 政覚, 経尋三代の門跡が記した日記。(1450~1527)
- 54) 山科言継(1527~'76)：言継卿記, 室町後期の公家の日記。
- 55) 中原康富(1400~'57)：権大外記の日記。
- 56) 狂言全集：国民文庫研究会, 狂言記補遺, p.167 (1913)

- 57) 遠藤白川文書：福島県史第7巻，p.474，弘治3年（1557）7月22日の項。
- 58) 黄帝内经：[素問]と[靈枢]からなり，黄帝と当時の名医岐伯等の問答体で書かれている，中国の最古の医書である。
- 59) 黄帝八十一難経：中国古代の医書，偏鵠の著作といわれる。
- 60) 中臟経：同様中国古代の医師華陀の作といわれる。
- 61) 傷寒論：三世紀の末，張中景の作。
- 62) 吉益東洞：医断，古方派の医師，（1750頃）
- 63) 龍野一雄：[漢方と漢薬]（雑誌）9月号，（1943）
- 64) 浅井了意：假名草子・浮世物語，（1665頃）
- 65) 婆羅僧揭諦：仏教から来た梵語で，全て彼岸に至るの意。
- 66) 大平惠民和剂局方：中国宗代の大平惠民和剂局編，劉景源校正，人民衛生出版社，1985年初版。
- 67) 鈴木定寛：刪補家伝預薬集，（1778）
- 68) 難波恒雄：原色和漢薬図鑑，保育社，（1980）
- 69) 半井保房（医師）：盲聾記，（1520）
- 70) 吾妻鏡－貴志正造訳注：新人物往来社，（1976）
- 71) 快元僧都：快元僧都記，鶴岡八幡宮の別当の日記，群書類従，第25輯，p.526
- 72) 元陸軍参謀本部編纂：北条氏小田原城戦史，第2編，第3章，p.38
- 73) 仲田正之：江川坦庵，吉川弘文館，p.6（1985）
- 74) 太平記－山崎正和訳：河出新報新社，上。（1976）
- 75) 長祿記：群書類従，巻578，p.251
- 76) 小田原衆所領役帳－杉山 博校訂：近藤出版社，（1969）
- 77) 外郎文書：相州古文書の内足柄下郡文書16以下。
- 78) 本立寺文書課：本山葦山本立寺誌。
- 79) 寛政重修諸家譜：幕府が寛政年間（1789～）各家に提出させた家譜。
- 80) 秋山富南：豆州志稿，増訂 萩原正平，正夫，長倉書店。p.336（1967）
- 81) 秋里籬島：東海道名所図絵，（1797）
- 82) 林 述斎他：新編相模風土記稿，巻之24，村里部足柄下郡巻の3，小田原宿の項。[大日本地誌大系]，（1841）
- 83) 川口謙二：書かれない郷土史，錦正社。p.106（1965）



- 84) 群馬県松井田の旧家に残る, 陳文書.
- 85) 岡本玄治: 家伝預葉集, (1671) (国会図書館)
- 86) 花咲和夫編: 諸国買物調方記, 寛文末から元禄期成立 (1670 ~'90) 近藤書店, (1972)
- 87) 水戸市編: 水戸市史, 上巻, p.794 (国会図書館)
- 88) 藤田 明: 日本歴史 (雑誌), 2 (9) 672 (1900)
- 89) 相州古文書: 高座郡文書80.
- 90) 浅井了意: 東海道名所記, 仮名草子6巻, (1660頃)
- 91) 神奈川県史: 資料編 (4) 稲葉家引送り書, p.170 (1685)
- 92) 所 理喜夫: 戦国期職人の系譜, 角川書店, p.323 (1989)
- 93) 菊岡沾涼: 続江戸砂子温故名跡志, 日本随筆大成. (1735)
- 94) ケンペルの [日本記事訳抄] - 高橋景保訳: 海表叢書第二巻, 更生閣書店, 片岡永左衛門注, 相中棟志, (1928) (小田原市立図書館)
- 95) ケンペルの [江戸参府紀行] - 呉 秀三訳: 異国叢書, 雄松堂 (1929)
- 96) 小泉栄次郎: 和漢薬考, 朝香屋書店, (1927) (東京都立図書館)
- 97) 松岡 典等: 用薬須知後編, (1759)
- 98) 天保4年 (1833) 色吉通帖: (財) 製紙記念館資料.
- 99) 小西四郎: 日本歴史 (雑誌), 第10号, p.21
- 100) 戸羽山 瀚: 江川坦庵全集, 巖南堂, 巻1, p.1 (1954)
- 101) 杉山 茂: 外郎・透頂香と江川酒, 化学工業日報社, p.112 (1994)
- 102) 三島町誌: 大正1年, 三島町刊, (三島市立図書館)
- 103) 本間清利: 日光街道繁盛記, 埼玉新聞, (1975)
- 104) 著者不明: 合類日用料理抄, (1689)
- 105) 著者不明: 料理物語, (1643)
- 106) 浜松歌国等編著: 二千年袖鑑, (1849)
- 107) 小田原地方商工業史: ぎょうせい, p.229 (1989)
- 108) 歯車の会編: 「外郎」歯車26 (雑誌), 10月号, p.28 (1974)
- 109) おゆどのの上の日記: 宮中女官の室町初期から江戸時代までの日記.
- 110) 立川昭二: 病気の社会史, NHKブックス152, p.216 (1971)
- 111) 岡田章雄他編著: 日本の歴史・第6巻・群雄の争い, 読売新聞社, (1974)

- 112) 諸州古文書中相州古文書廿四所収.
- 113) 細川宗春・山川素石：二川隨筆, (1725)
- 114) 大磯宿本陣小島家文書.
- 115) 寛文規式帳：茨城県史料, 近世政事編第一.
- 116) 小田彰信：廢絶録, 文化末年刊.
- 117) 岡本 勝：大淀三千風研究, 桜楓社, (1971)
- 118) 遠藤元理：本草辨疑, (1681)
- 119) 三浦浄心：北条五代記, 寛永版.
- 120) チェンバレンー高梨健吉訳：日本事物誌・1, 東洋文庫131, 平凡社.
- 121) 中国医学大辞典：北京, (1988)
- 122) 上野観光連盟：上野繁昌史, (1963)
- 123) 天野 宏：薬文化往来, (1992)
- 124) 寺島良安：和漢三才図會, (1712)
- 125) 吉岡 信：近世日本薬業史, 薬事日報社, 附表・江戸売薬p.18, (1989)
- 126) 富井康夫：京都社会史研究, 同志社大学・人文科学研究所編.
- 127) 祇園社記 (第十五) 八坂神社記録上収載.
- 128) 日本歴史地名大系・京都市の地名：中京区p.803.
- 129) 木田安彦：にほんのまつり, 木版画, 講談社, (1985)
- 130) 米山俊直：祇園祭, 中公新書369, p.29
- 131) 林 四郎：百味筆筭, 医学出版社, (1959)
- 132) 南方熊楠：南方隨筆, 正・後, 沖積舎, (1922)
- 133) 池田松五郎：日本薬業史, 薬業時論社, p75 (1929)
- 134) 安田徳太郎：人間の歴史2・日本人の起源, 光人社, (1952)

## 謝 辞

本論文をまとめるに当たり、多くのご助言を頂き、又、終始ご懇篤なるご指導を賜りました千葉大学教授・山崎幹夫先生に心から感謝いたします。

又、本論文作成に当たり、多大なるご支援を頂きました日本薬史学会、常務理事・山田光男先生に厚く御礼申し上げます。

## 主論文目録

本学位論文内容は下記発表論文による

杉山 茂：[外郎(ういろう)] について(1)：

薬史学雑誌, 31 (1) 74～80 (1996)

杉山 茂：[外郎(ういろう)] について(2)：

薬史学雑誌, 31 (1) 81～92 (1996)

杉山 茂：[外郎(ういろう)] について(3)：

薬史学雑誌, 31 (1) 93～95 (1996)

## 主査，副査名

本学位論文の審査は，千葉大学大学院薬学研究科で指名された，下記の審査委員により行われた。

主査	千葉大学教授	(薬学部)	薬学博士	山崎 幹夫
副査	千葉大学教授	(薬学部)	薬学博士	畝本 力
副査	千葉大学教授	(薬学部)	薬学博士	今成登志男
副査	千葉大学教授	(薬学部)	薬学博士	渡辺 和夫
副査	千葉大学教授	(薬学部)	薬学博士	相見 則郎